

## もくじ

---

開会のご挨拶  にっぽん子育て応援団	2
ご挨拶  一般財団法人こども未来財団	3
第1部 産前産後のケアアプローチの実際	4
第1部のねらい	4
事例発表	5
NPO 法人ながれやま子育てコミュニティなこっこ	5
NPO 法人子育て支援グループ amigo	8
グループディスカッション	14
わがまちに求められる産前産後ケア	
第2部 子育て家庭を支える重層的ネットワークの実際	16
第2部のねらい	16
事例発表	17
NPO 法人わこう子育てネットワーク	17
NPO 法人びーのびーの	20
グループディスカッション	23
わがまちに求められている重層的ネットワークとは	
閉会のご挨拶	28
子育て支援者研究セミナー参加者アンケート集計結果	29
当日配布資料	31

---

## 開会のご挨拶



にっぽん子育て応援団企画委員 日本こども家庭総合研究所名誉所長 小児科医 柳澤正義

にっぽん子育て応援団企画委員の柳澤正義でございます。本日の子育支援者研究セミナーは、一般財団法人こども未来財団とにっぽん子育て応援団の共催で行います。

セミナーのタイトル、「子育て現場のケアコミュニケーションを考える～子育て家庭に寄り添うために～」というテーマは、チラシの趣旨にも書いてありますように、子どもへの虐待予防、妊娠中から切れ目のない支援、ケアをしていくという認識に立っています。

私は小児科医で、長年、虐待防止に関わってきました。こども虐待の急増はご存知の通りで、平成25年度は7万件をゆうに越える虐待が発生しています。10年前、20年前は、早く見つけて早く適切な対応をするのが課題でしたが、今は妊娠中、あるいは生まれてすぐからハイリスクの家庭を把握して、適切なケアをすることによって虐待を予防しようということが強調されるようになっております。地域、関係団体、自治体、国をあげてその取り組みを行っているところです。

端緒になったのは、平成21年に報告された、厚生労働省が継続的に行なっている虐待死亡例の検証です。その検証の結果、虐待によって死亡する子どもの大半が乳児で、しかもその大半が新生児でした。生まれて数日のうちに殺されることも多い。この結果は、それまで虐待というものを比較的離れたところからご覧になっていた、産科医をはじめとする周産期医療関係者に、大変なショックを与えました。以来、妊娠中、子どもが生まれる前から取り組みをしていく、ということ強く促されるようになりました。

赤ちゃんが生まれる前からはじまる子育て支援とケア。ケアの基盤となるのが地域であり、本日セミナーのキーワードのひとつが「地域における重層的な支援です。まさにそういうことが喫緊の課題として求められているのではないかと思います。」

今日、お集まりのみなさんは、子育てひろばをはじめとする地域子育て支援を実践されている方だと思います。本日は、子育て支援NPOの方々をお招きして、その実践についてご報告いただきます。事例の発表をしていただいて、研究といいますか、ただ話を聞くだけではないディスカッションをしていただき、明日からのみなさんの実践に活かしていただくことを期待しております。

簡単ですが以上で開会のご挨拶に代えさせていただきます。

## ご挨拶



一般財団法人こども未来財団常務理事 安藤哲男

一般財団法人こども未来財団常務理事の安藤哲男です。本日は、ご参加いただきありがとうございます。

私どもでは、児童の健全育成、子育て支援、その最前線においては、支援者の方の質の維持向上が大変重要だと考えております。法律や制度の整備はもちろんですが、それを成り立たせるためには、現場を担うのに十分な数の支援者の確保と育成が不可欠です。

そのために、こども未来財団では、支援者の支援ということで、本日のような支援者向けの研修会、セミナーのご提供を行っています。これには二つの大きな事業がございます。ひとつはボランティア育成事業で、大規模研修と小規模研修を行っており、本日のセミナーはその一環です。二つ目には教育機会の少ない認可外保育施設の従事者向けのセミナー等を、道府県および中核都市といった自治体との協働で行っています。

因に、平成 25 年度は大規模研修会を 24 団体、参加者のべ 4163 名、小規模研修会を 63 団体、参加者のべ 7157 名、認可外保育施設従事者研修会は、81 道府県指定都市中核都市のご協力により 182 回、参加者 4943 名の開催実績となっています。

今日の研修がみなさまにとってスキルアップになることを願いますとともに、横の連携、連帯感が培われることを祈念致しますとともに、本日の研修会開催の準備に当たられました方々に深く感謝申し上げまして、ご挨拶と致します。本日はありがとうございました。

## 第1部

---

# 産前産後の ケアアプローチの実際

---



**事例報告者** NPO 法人ながれやま子育てコミュニティなっこ代表理事 田中由実さん  
NPO 法人子育て支援グループ amigo 理事長 石山恭子さん  
**コメンテーター** 東邦大学看護学部看護学科教授 福島富士子さん  
**ファシリテーター**  
NPO 法人せたがや子育てネット代表理事 につぼん子育て応援団 松田妙子さん

## 第1部のねらい

ファシリテーター・松田妙子さん

産前産後は保護者が最も弱い存在に陥りやすく、人生のスタート期を支えようということ。なかなか地域資源につなげることが難しく、自ら地域資源につながっていくことも難しい時期です。地域のほうからどのようにアプローチしていくかがポイントです。子ども・子育て支援新制度が始まるというところで、新制度の枠組みに入っていない部分を、どう補っていくのかということもポイントになります。

子育て支援の中での産前産後の位置づけも、この十数年でようやくカテゴリーとしてできてきたな、という実感があります。かつては、産後というと3-4歳というイメージで語られることが多く、子ども・子育て分野に関わる方々と話がかみ合いませんでした。改めて施策として、産前産後というカテゴリーを切り取って考えるようになったのは、ここ最近のことです。医療のほうでは周産期、母子保健として取り組まれています。何より地域の側に妊娠期から出産後を支えるという意識がありませんでした。新しい産前産後のケアアプローチの実際ということで、ここ数年の実践についてお話を伺い、福島先生からコメントをいただきながら進めていきたいと思います。

## 事例報告

# 「私だけ」から「私もだよ」へ 当事者から生まれた 産前産後ケアプログラム

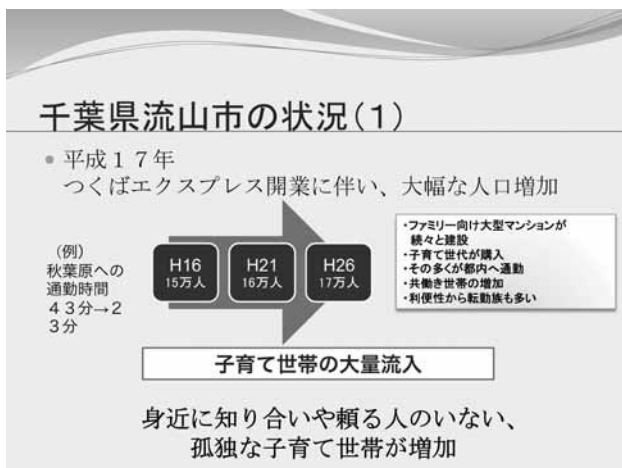
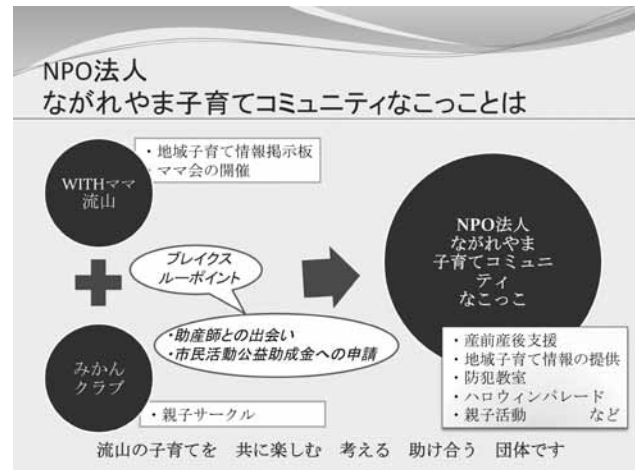


NPO 法人ながれやま子育てコミュニティなこっこ代表理事 田中由実さん

### 団体発足の経緯

私たちが活動をはじめたのは2007年で、私の第一子が1歳半の頃でした。当時、WEB地域子育て掲示板 With mama の流山の管理人をしていました。それとは別に今のなこっこの主要メンバーと一緒に「みかんクラブ」というサークルを立ち上げ、お世話になっていた助産師さんと一緒に、流山で初めて子育てを始めるお母さんたちが勉強できるような講座を始めようと活動を始めました。資金面では、流山市が市民団体の助成支援を始めたので、それを利用しようということになりました。それが後にご紹介する「新米ママ講座」の始まりです。助成金を申請したことで、流山市とのつながりも出来ました。

それから徐々に活動を広げていって、2011年にNPO法人化し、現在の「ながれやまコミュニティなこっこ」になりました。



### 流山市の現状

流山市は人口17万人で、平成15年につくばエクスプレスが開通する前は15万人でしたので、急速に増えたこととなります。都心へのアクセスが増えて、マンションがどんどん建ち始め、現在も増え続けています。主に子育て世帯がどんどん流入して来て、それに合わせて出生率も上昇、全国平均1.43を上回る1.5になっています。

### お産カフェ

引っ越してくる人が多いというのは、周りに知り合いがいない孤独な育児をしている人が多いということ。そこで、初めての子育て応援プロジェクトとして切れ

目のない支援を目標に、お産カフェを行っています。

妊婦、経産婦に関わらず、妊娠期からどなたも参加出来ます。月1回の開催。ノンカフェインのお茶とスイーツをお出しして、参加費は300円。こだわったものを出すので100円くらいのお菓子です。

お産カフェ開催の目的は、初産のときは、どうしても産むまでのことではいっばいで産後のイメージができませんので、産んでから困ることがほとんど。

初回の方には、リラックスしてお産に挑めるよう、助産師さんが作ったお産の流れを書いたカードを使ってお話しします。リピーターの方には私たちのグループに入っていて、お産のとき、産後にどういうことができるのか、話してもらい、地域で子育てする際の情報交換をします。出会った方同士がさらにつながれるよう、終了後にアドレス交換の声掛けなどもしています。

妊娠中にママ友ができる割合は3割という話を聞いたことがあります。子どもが生まれてからでは外に出るのが限定されるので、少しでも知り合いを増やす機会になればいいと思って開催しています。

## 新米ママ講座

産後1カ月から6カ月の間に参加していただけるこの事業は、7年目で前半と後半の2日間に分けて行なっています。

1日目は、助産師さんが講師で、月齢に分かれてグループトークを行ないます。グループごとに母乳やミルク、今不安に思っていることなどを付箋に書き出してもらい、カテゴリーごとに付箋を分類し、そのカテゴリーごとに助産師さんが答えていく形を取っています。

初回の1カ月後に開催する2日目は、住所が近い人に分けてのランチ会。「まごはやさしい」（まめ、ごま、わかめ、やさい、しいたけが入っていると、とても栄養バランスがよい）というキーワードを元に「新米ママ弁当」を特注して出しています。ランチタイムの目的は、女性にご飯を食べると仲良くなりやすいというところからきています。この時期は、赤ちゃんを抱っこしたままでゆっくりご飯を食べることが出来ません。せめて講座ではゆっくりご飯が食べられるよう、ボランティアの抱っこ隊がぐずる赤ちゃんを抱っこしてくれます。食事後の講座の間も、抱っこしてくれます。後半は栄養士さんが来て離乳食教室。離乳食を、まだ始めているグループと始めているグループで分けています。「食べたものがそのままウンチで出てくるが大丈夫か」という質問が出されるなど、まだ離乳食を体験していない人にも勉強になります。

「悩んでいるのは私だけではない」と、少しでも悩みを共有できる友達をつくる。「私だけ」の孤独な育児ではなく、「私もだよ」の支え合いを作るということ。私たちのようなグループがあることで、上手に地域に慣れてもらうことが目的です。アンケート結果からもその目的が果たしているのかなと思っています。

産前は病院で手厚い支援があり、仕事にも出かけて行くことが出来たりしますが、産後は近所に頼る人もいなくて、赤ちゃんと二人きりの慣れない育児で、体力的にも精神的にも限界な人が多い。このような講座に参加することで、近所に一緒に子育てをする仲間と出会い、病院に相談するほどではない悩みも、いつの間にか解消されているという機会になっていると思っています。帝王切開やミルクに罪悪感を持つ人もいます。不安や劣等感を前向きに変えてほしいと思います。



## なこっこベビー

ひろば的な感じでおしゃべりと工作の時間を設けています。開始から1年。参加費200円。

新米ママ講座のその後のフォローとして始めました。最近ひろばの利用者が減っているようですが、施設の人に訊いてみるとベビーマッサージなどのイベントのときは人がいるが、人が来てから電気がつくようなところは来ていない。働く人が増えた、そういう場に行くこと自体が面倒になっているということも考えられます。イベントに参加するには、それなりのパワーが必要です。ファシリテーターなしで友達を作るのが面倒で腰が重くなっているのかもしれない。

毎回30組くらいの親子が参加。お産カフェ、新米ママ講座受講者がほとんどなので、参加者も、知っている人が多いので安心して参加しているのだと思います。月に一度、先輩ママと話すと、ちょっと心配なことも、たいしたことでもなかったことがわかるなど、ほっとして帰っていただけるのかなと思います。

ひとつエピソードを。赤ちゃんの背中に「しこりがある」と不安で来た人に「肩甲骨じゃない？」と言ったら安心して帰っていったということがありました。

## 男ができる産後の準備

ママだけでなくパパになる人にも産後の準備が必要ということで、2年前から、所沢で「ままのわ」という産褥ヘルパーの会社を経営する渡辺大地さんを講師に、これから父親になる人向けの講座を行っています。

産後クライシスという言葉があるように、父親の育児時間などが日本の倍にもものぼるアメリカでは、父親の10%が産後クライシスになるくらい社会問題化しています。この講座の特徴は、講師が男性であることで、イクメンのプレッシャーを与えないということ。会場内に授乳室も設けます。保育付の父親講習として渡辺さんの活動が厚生労働省白書で紹介されたときに、なこっこでの開催風景の写真が掲載されました。

夫婦で参加してもらいますが、席は男女別。男女分かれてワークを行います。男女別にワークをすると、



夫婦間で考えがずれていることがわかります。産後クライシスは、夫婦だけでなんとかしようと思うと起こってしまいがち。やはり産褥期は誰か第三者の手を確保しておくことが大事です。また、生活スタイルは人それぞれ。問題が起こってからでは遅いので、夫婦で産後の生活のシミュレーションをよく行って産後を迎えることが大事。

#### プログラム全体の参加者からの感想から

講座を受けた人からは、「夫がやさしくなった」とか「関係がよくなった」という、うれしい声が聞こえます。「お茶を飲みながらテーマにあわせて話せてよかった」「人見知りが始まって、自分のところで泣き止んでくれ

たとき、苦勞が報われた」。中には、夫に言えなかったことを渡辺さんに相談したことがきっかけで、「パパは産後すぐに友達を連れてきたことを謝ってくれた」という参加者もいます。

産前産後の途切れることのないサポートがあることで、育児を楽しめているというご感想も載っています。

#### 今後の課題

第一に、産褥ヘルパー事業の立ち上げ。前々から考えているが、なかなか着手できない。流山市は産褥ヘルパーについては、介護事業者紹介に留まっていますが、なかなか引き受けてくれる事業者がないのが現状です。高齢出産も増え、両親が遠隔地に住んでいたり、すでに亡くなっていたりで、産褥期のサポートのニーズは高まっています。

出産は地域に参画する最大のチャンス。子育て世代が声を上げていくきっかけづくりや人材発掘育成のチャンス。子ども・子育て会議に出たり審議会に出たり、勉強会もやりたいと思っています。

**松田** 流山市の人口が17万人。出生数は年間何人くらいですか？

**田中** 1400人です。

**松田** 年間にどのくらいの親子に出会っているのでしょうか。

**田中** 新米ママ講座は年3回開催で毎回25人くらい参加しているので、年間75人くらいに会っていますね。

お産カフェは毎月1回くらいの開催で、だいたい毎回10人くらいですが、リピーターの方がびたっと来なくなったときなど、年に1回は誰も来ないときがあります。一人だけ参加のときには、友達を作れないけれど、逆に助産師さんが独り占めできるメリットもあります。病院でゆっくり助産師さんにお話を聴く機会がないという人がいるんです。ゆっくり話が聞けたのでよかったという感想をいただいたりもします。

**松田** 妊婦さん向けの活動はあちこちで始まって入るんだけど、妊婦さんとどうやってつながっていくのかについては、どの団体も苦勞していると思います。どのように工夫なさっているんですか。

**田中** 妊婦さんへの広報は大変なんですけれども、第一は市の広報誌ですね。

お産カフェなどは公民館と共催してやっています。公民館と共催すると市報の子育て欄に掲載されるんです。広報誌や公民館掲示のポスターを見ての参加が多いです。最近は、市にお願いをして、母子手帳に直接ちらしをはさみ込んでもらってもいます。

**松田** 最近は、母子手帳とともに渡される資料が多くて、ひとつひとつを認知してもらうのが難しくなっていると聞いたりしますが。

**田中** いえ、母子手帳にはさんだチラシを見て来てくださる方も多いです。



# 「一緒に子育てしようよ」 というプログラム



NPO 法人子育て支援グループ amigo 理事長 石山恭子さん

実は amigo はファシリテーターの松田妙子さんが始めた活動で、私はそれを引き継ぎ代表をしています。のちほど会の活動についてお話しますが、その前に、活動の継続や、どうやって仲間を増やすのかといった辺りのご説明につながるとお思いますので、私自身のことをお話しさせていただきます。

## 当事者から生まれた活動——「私ものがたり」から子育ての現状をみる

私自身、実は今日で 40 歳になるんですけども（拍手）、栃木県で生まれました。大学進学を期に東京に出て結婚しました。大学卒業後は航空会社で客室乗務員をやっていたので、とても急がしい毎日を送っていました。地域活動とはま逆の生活をしてきて、本当に子どもを生むまでは地域のことは感覚として何もわからない状況でした。妊娠中は妊婦や育児仲間と言った友達はいませんでした、「別に私、友達いるしなあ」と思っていました。ですから、同じような人の気持ちもよくわかるというのが私の特徴です。

結婚をして、出産をして、お友達が要らないと思っていたんだけど、暇だなあと不安だなあとかかっていて、遠くにおやつを買いに行くことしかしていなかったの、食べることしか趣味がないって、どうしようというか。児童館に行っても、どこまで自分のことをしゃべっていいのかわからない。職歴を話すと、職業のほうばかりみんな気にして、「そっちじゃなくて私を見て」という感じでした。産後に陥る特有のメンタリティーがあると思いますが、まさに同じでした。

いろいろ出かけていきながらも、町でチラシを手にした amigo の子育てサロンや、産後の運動など、いくつかの子育てグループに行きましたが、amigo が何だかとても居心地がよくて。住まいから遠くて、自転車だと 15 分くらいなのに、まだ子どもを自転車に乗せられなくて、すごく時間をかけていったんだけど、amigo に通いました。なんとなく“なついて”いった感じです。

当時の amigo は、昭和の香り漂う無認可保育園の 2 階にあって、ママたちの部室なんて呼んでいた頃です。それまで、とてもきれいな世界にいたので、畳にいろいろなものが散乱しているのに、いちいち驚いたりしていたんですが、でも、「なんか居心地がいい」みたいな感じでした。働きたいという気持ちもなく、ただ暇だったので、「子連れスタッフで手伝います」とスタッフになりました。

amigo が部屋を借りていた無認可保育園に、ちょうど息子の年齢のクラスに空きがありまして、息子を保育園に入れました。ちょうどその頃、夫が海外に単身赴任になったので、「じゃあ、私、これで堂々と働けるぞ」と、昼間の時間は amigo で事務作業をしたり、ひろばのお手伝いをしたりしました。同時に、産後、どこに向かって生きていけばわからない頃、ある運動のクラスに行き、運動したら気持ちがすっきりした、「産後でも運動できるよ」「一緒に子育てしようよ」と伝える側になりたいと思って、amigo の顧問をしている助産師がやっている産後のチャイルドケアやダンスを習ったりして、産前産後のからだとか、からだのケアを

学んで行きました。実際からだのケアをすることで、どんどん状態が良くなっていくなと感じているので、今ではグループの代表とは別に、講師として産後の方に、からだのケアなどを、お伝えする機会もあります。

そうこうするうちに、2009 年、世田谷区が拠点事業を始めることがきっかけとなって、「おでかけひろば@あみーご」を開設しました。

## 産前産後プログラム

顧問として関わっていただいている助産師さんや保育園の保育士さんたちに講師をお願いしながら、実際には子育て中の母親が中心になって主体となっ

### 子育て支援グループAMIGOについて

「一緒に楽しく子育てしようよ！」を合言葉に、助産師や保育士と連携しながら、子育て中の母親同士が支え合う“育児相互支援”を2001年から実践。2014年に法人化。

<b>顧問3名・13名のメンバー</b>	財)世田谷トラストまちづくり 地域共生のいえ
<b>産前産後プログラム</b> ・マタニティヨガ ・ベビーマッサージ ・産後ケアクラス	<b>子育て広場の運営(世田谷区補助事業)</b> ・「おでかけひろば@あみーご」 テーマは“放牧” 月～金 10～15時 0歳児～一時預かり
<b>産後訪問支援事業</b> ・マザリングベル 産後1ヶ月のご飯とからだ	<b>出張型定期講座(世田谷区主催)</b> ・産前産後のセルフケア講座 世田谷区5地域の児童館で月2回開催
<b>出版事業</b> ・ナギ	「せたがや子育てネット」が 世田谷区より委託



て実施しています。

当事者同士で支え合う、育児相互支援。最初の出会いとして、専門家のアドバイスではなくて、ちょっと先輩の私たちが受け止める。それで解決できることって結構ありますよね。たとえば、上手に抱っこが出来ないとか。保育士さんにお尋ねしなくても、経験者と話すだけで解決する。「うちでは、こうしてたら夜泣きがなくなったよ」「ご飯食べない子には、のりで巻くと食べるよ」と経験を手渡す。別に栄養士さんに聞かなくてもわかることだったり。そういう子育ての智恵は、人に渡すほうも人の役に立ったということで、力をもらえる。伝え合うことがお互いに役に立ちます。

私も子どもを産んでから10年経ちましたので、今の子育てについては、1カ月前に子どもを生んだママのほうがよくわかっていますよね。行政の制度や仕組みとしては私もわかっていますが、使い手としては、使い勝手などを知りません。「こういう仕組みだよ」と伝え、「お隣の人に聞いてご覧」と当事者同士が伝え合うことを促す。そういう役割を、私をはじめとしたスタッフが担うというスタイルでやっています。

産前産後プログラムとして具体的には、妊婦さんにはマタニティクラスとして、助産師の先生に講師をしてもらっています。実際にポーズなどの他に、産前産後の暮らしのことを挟んでいって、産後の母乳育児、まだイメージってわからないだろうけど、こんな感じですよとか、病院で聞きそびれたことも、ここで聞くことができます。

### ベビーマッサージ

赤ちゃんが生まれて可愛いんだけど、どう関わってよいのかわからないというときに、大変有効なプログラムです。手技としてプログラムとして学ぶと出来るようになる。私も実際そうでした。赤ちゃんに声をかける、あやす、歌を歌うということが自発的にわいてこなかった母親。それが、最初にプログラムとして習うことで、出来るようになるんです。実際に習うことで出来るようになる人もいますので、有効なプログラムだと思います。

### 産後のケアクラス

私の産後を救ってくれたプログラムで、バランスボールなどを使って、息が弾む程度の運動をする。ヨガをしたり、おしゃべりをしたりして過ごす。赤ちゃん連れで運動ができるよ、というクラスです。真ん中にゴザを敷いて赤ちゃんを寝かせ、泣いたら抱っこという感じで進めます。それが有料のプログラムになっています。

### 産後訪問事業 産後マザリングベル

産後手のないお宅にお手伝いに行きますよという事業。

まずコーディネート。妊娠中に、実際にお宅を訪問して、産後のシミュレーションを行います。妊娠中は、産後のことまでイメージ出来ません。お宅に伺って「赤ちゃんを帰ってきたら、どこに寝かせよう」「沐浴はどこですみますか?」「産着は畳んだままですか?」などとお尋ねしながら、具体的に赤ちゃんとの暮らしをイメージしてもらい、産後の生活の準備をします。

産後はシッターが訪問し、ご飯づくり、産後休むための家事援助など、おかあさんじゃなくても誰でもできる部分を、シッターがやります。できればおかあさんが赤ちゃんに専念できる、ちょっと横になれるようにお手伝いに行きます。

このときのレシピなどが好評なので、後ほどご紹介する出版事業で冊子にして販売しています。

### おでかけひろば@あみーご

2009年から、子育てひろばの運営を世田谷区の補助でやっています。

世田谷トラストまちづくり「地域共生のいえ」という面白い仕組みで、市民活動のために、自宅や空いている家を開放して使ってもいいよという大家さんと、活動場所を探している市民団体とをマッチングする仕組みです。そこに、@あみーごの大家さんが応募してくださって、お庭があって、リビングがあるお宅を「子育て支援の方に使っていただけたら」というお申し出で、使わせていただくことになりました。

プログラムや産後訪問をやるなかで、ひろばを作るんだったら、テーマは「放牧」にしようと思っと思っていました。わが子と離れにくくなっていて、ずっと抱っこしているとか、歩き始めたら使うハーネスなども出ています。私自身が育ったように、この中では適当にいつも誰かが見守っていて、親も子も自由になれるような場所にしようと思いつきながら開催しています。

今は週5日、昼間の10時から15時までで、今年から0歳児からの一時預かりも事業としてやっています。

## 出張講座 産前産後のセルフケア講座

妊婦さんと産後5ヶ月未満のお子さんを連れのお母さんが参加できます。定員20名で月2回開催です。6、7年やっていますが、最初はほんとに、1組、2組の参加でした。

今は区の事業として世田谷区が広報をしていて、「新生児訪問でチラシをもらいました」「図書館の張り紙を見て来ました」と参加する方が多いです。とても応募が多くて、キャンセル待ちになることが多いです。

区民センターの会議室や子ども子育て総合センターなどで開催していましたが、今では地域の児童館を回って開催する事業になっています。

## 世田谷区の特徴

人口87万人で年間出生数は7700人。私が活動を始めた頃は年間出生数は6000人と言われていたんですが、この5、6年で7000まで行ったという感じです。

5つの行政区に分かれていて、それぞれの地区に行政センターと活動の拠点となるまちづくりセンターがあります。

世田谷区の子育て環境の特徴としては、人口数の年少人口、特に0歳から5歳まではとても増えています。引っ越して生む人、生んでから引っ越してくるといった若い世帯が転入してくるので、子どもの数が多いという特徴があげられます。若年出産が少なく、高齢出産がすごく多い。20代よりも30代の出産がすごく多くて、40代の初産も珍しくありません。生んでも働き続けられるから、保育所待機児童が多いのかなという印象があります。

全国でも有数の保育所待機児童の多さで、箱は作れど作っただけ待機児童も増えるという状況で、実際にひろばでも相談を受けます。妊婦さんがセルフケア講座に来て、「生む前から憂鬱です」と言ったりします。実際にいろいろ見ていると、本当に入らなきゃいけない人は、点数を高くする方法を考えるのではなく、何とかして入っているんです。だからそういう切り口で応えています。「本当に保育が必要な人は入れているので、あきらめずにやってください」、「今心配しても、何の役にも立たないので、心配しないで過ごしてください」と言ったりしています。

## 世田谷子ども計画の基本的な考え方

「子どもの視点を重視しよう」というところで、行政に働きかけていることが多いです。

産前産後ケアのところでは、区の産前産後のお母さんサポートとして、「産前産後のヘルスケア講座」はNPO法人せたがや子育てネットが区から受託して開催しているもので、amigoで講師をやらせてもらっています。「さんさんサポート」は、ホームヘルパーさんの派遣をお願い出来る事業で、妊婦から産後1年くらいまでの間に利用できます。

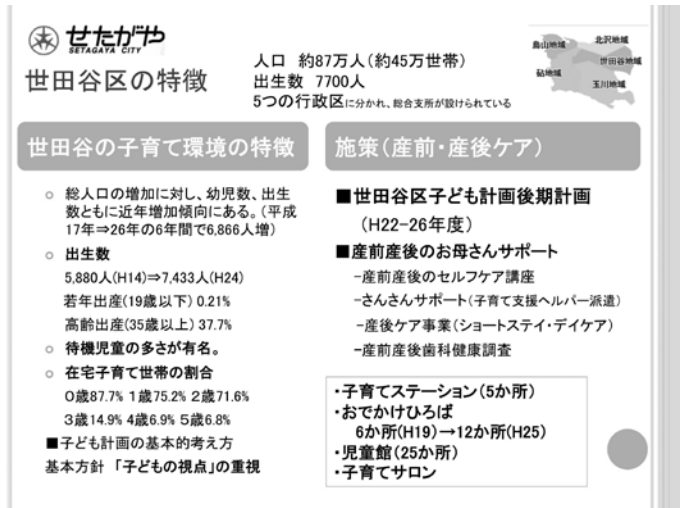
「産後ケアセンター」は退院直後から、デイケアとともに宿泊を伴ったケアが受けられる先進的な施設です。

在宅子育て家庭へのアプローチとしては、5カ所の地区別に拠点となる子育てステーションが各1カ所あります。預かりや保育のほか、おでかけひろばも併設されている施設です。さらに25カ所の児童館。社会福祉協議会の管轄となる子育てサロンもあります。

## 具体的な区の施策と私たちのグループとの関係

産前産後のセルフケア講座も初回2006年で、子育てカレッジという区の取り組みに対して、産前産後のことを入れてくださいとお願いをして始まりました。月に1回、1カ所だったのが、月に2回、児童館でも開催出来るようになりました。今では母子保健の枠も乗り越えて、妊婦さんにも産前ケアの講座を開催出来るようになってきました。最初、大きな講座の中で枠をもらってやっていたことを、中身を変えて独立した講座へと発展して来ています。

「さんさんサポート」が出てくる前に、区へマザリングベルを提案にいったのですが、「世田谷区で生まれる年間6000家庭の赤ちゃん全部にamigoさんが訪問できないですよ」と言われて、ああ無理なんだなと納得。でも、委託先を利用者が選んでお願いするという形になったのは、受け手にはなっていないけれど、私たちが提言したことになると思います。



さらに、産後ケア事業については、平成16年に、東急電鉄さん、NPO法人マドレボニー多産と一緒に、韓国にある産後調理院を日本に作ろうというフォーラムを開催しました。その後、産後ケアセンターができたときには、フォーラムがそのきっかけになったと感じました。

おでかけひろば事業も、大家さんとのご縁があって週3回でやっていたのが、今では区からの委託事業として週5回開催となり、一時預かりもやっています。

### 所感と課題——暮らしに根ざした活動

民間がやることと行政との兼ね合い。産後ケアセンターを建てることは、私たちにはできませんが、枠を作っただけで中身を充実させていくことができます。市民に根ざし、暮らしに根ざした活動をしていく。

産前産後ケアは、個別対応。ひとり一人違うので、十把ひとからげな対応はできません。ずっとずっと付き合っていくこと。お互い様という感覚を、相互支援を体感していただくというのはグループで体感していただく。存在を認め合う。

今、お母さんになってゆく人たちも、しっかり大人として生きて来たけれども、今現在、ちょっと不自由な感じで戸惑っている。でも立派な大人なんだということをちゃんと認める。さらには、脇の甘さが実は大事。「私も大丈夫なのね」と安心してもらおう。完璧にして待たない事が大事です。行政がやるとクレームになってしまいそうなことでも、それがグループのよさ、民間のニーズだと思います。

この社会で子どもを生み育てていく。おとなは。もっとがんばりなさい、成果を上げなさいという言葉に浴びて育って来て、ひとたび子どもを生んだら、そこでも頑張ると言われる。そういった育ちの中で我慢してきた。でも、大変な時期なので、その繊細なところを共有していく。世田谷でも、自分の子どもを抱っこするまで、赤ちゃんを抱っこしたこともおむつ替えをしたこともなく、おっぱい飲んでのを見たことがないまま親になっている人が多い。家でずっと泣いている赤ちゃんも、外では泣いてのを見たことない。やはり外のほうが気持ちがいい。社会でしっかり、ちょっと感受性を閉ざして生きて来たのが、赤ちゃんという感受性の塊に出会って、そのギャップが簡単に埋まる訳ではないんです。それが今の子育ての課題かなと思います。いろんな課題というのを解決するのが、子育て。そういった自分の個性と付き合っていく、というのが産前産後ケア。助けてと言えたらいい。できてないのが恥ずかしいというのが今の子育て。助けてと言えようになれるといいと思う。暮らしを整えていく、というのに付き合っていくのが産前産後支援かなと思っています。

幼稚園ママと保育園ママが同じ土壌にいる時期って、子どもが0歳のときくらいしかないんですね。だけど、やがて小学校で机が並ぶんです。かつて一緒に過ごしたというのがあるのとないのとでは、何かあったときの感覚がぜんぜん違うんですね。産前産後ケアって、学童期、思春期にもつながっていくのかなあと思っています。子どもたちもやがて市民になっていくので、すごく大事なケアだなと思っています。産前産後って心身が非常に柔らかい時期なので、暖かさを届けられたらいいなと思いながら活動をしています。

**松田** おふたりに、ここでお尋ねしておきます。活動費というか、活動資金はどうしていますか。

**田中** 自分たちは助成金、全労災の助成金でやっています。場所代とかでそれも消えてしまいます。他にもやりたいことはありますが、若干、限界感があります。行政から委託を受けていると、お金が潤うかもしれないけど、縛りになるかとも思います。

**石山** 私たちは結構脱して来たと思いますが、有料事業もやっています。お金を持っている人にも来ていただきたいと、ちょっときれいなパンフレットもつくっています。スタッフや事務の人にもお礼ぐらいは払えるようにしています。その程度の有料価格設定。またほかにも講師業で呼ばれることもしていて、その謝金も団体に回しています。最近個人的に収入面で(夫に対して)ようやく仕事と言えるようになった気がします。13人スタッフがいるんですが、みんなパートさん以上の収入にはなっていると思います。

**松田** フロアのみなさんがうなずいているので、みんなそんな思いをして運営しているのか～と思いました。

amigoの補足をします。最初は産前産後が大事だということが言いたかったので、amigoの提供内容は、価格的に高くてもだんだん普及してくれば、やがては廉価になる、ということを目指しています。それは、「ビジネスなの？ 活動なの？ 運動なの？」のハザマでやっているということ。

おふたりとも、子育て当事者がやることのよさというのがにじみ出てたかな。最近はビジネス界の参入もあり、雑多な感じにも心配のありつつ、ビジネス関係の人たちにもわかってもらいたいなって思いながらやっていく必要があります。当事者の参画で、「中身をつくるのは地域の私たち」という気持ちが大事だと思います。

## 事例発表まとめ



**松田** 福島富士子先生は、国立保健衛生院で、保健師さん、助産師さんなどを育成、支援者の支援をしてきた方です。「地域を見る」と言い続けてきました。世田谷の産後ケアセンターを立ち上げるときにお世話になった方です。

ここで、福島先生に振り返りをお願いします。

### 東邦大学看護学部看護学科教授 福島富士子さん

まとめなんてとんでもないというか、お二人の発表を聞いてすごく勉強になりました。感性という言葉がありましたが、実践の中からの言葉がそのまま宝物になるようなところが、印象的でした。流山市の「出産は地域と関わるチャンスなんだ」という言葉。本当にその通りだなと思います。

こういう子育てを支えようという住民の活動は昔からありました。にっぽん子育て応援団企画委員の柳澤先生の「愛育班」の活動も原点。岡山県や山梨県では、まだまだそういう活動が続いていて、ピアグループによる支え合いの活動がつながって来ていました。日本の昭和の時代から続いていたものでしたが、今、なぜそれがなくなっているのか？ 女性の働き方が今と昔では違ってきている。女性の時間の使い方、労働市場にない働き方、活躍の仕方。てんびんにかかってしまう。いいことだけど、「お金がとれないから」で地域活動等は負けてしまう。昭和30年代の愛育班活動は衰退していき、お互いさまというのがなくなって、お金を払えばなんとかなる時代に移行していきました。

1990年代から2000年代にかけて、少しずつ変わって行って、女性の働きはお金だけのために働くものではなくなっています。

社会活動事業、また市場経済とも違う、社会事業家という人たち？社会事業家というよりも、もっと柔らかい感じ。松田さんたちのような、必要なことで、やりたいことをやって、行政からお金ももらってきました、というのは素晴らしい。

企業も産前産後事業に参入し始めています。抜け目ない。企業や民間だけでなく、みんなでやらないといけない。企業でやるとしたら、福利厚生なのかな、となってくる。企業も福利厚生をどうしていくかで、困っています。福利厚生を担う会社が出来ているくらい。お宅の女性社員の福利厚生として、産後ケアを利用しませんか？と提案するなど、女性社員への福利厚生として展開していけばいいのではないのでしょうか？ 昭

和 30 年代は主婦のためのアイロンかけ講座などの福利厚生講座、家族計画（避妊）講座なども企業がやっていた。だんだんそういうのがなくなってきました。

最近企業は福利厚生のネタもつききていて、外部団体に委託しています。福利厚生＝生活を整える、生活モデル、衣食住を整える。暮らしを整える、そこをしっかりとやっていくことが大事です。そこがちゃんとできず、コンビニで食べ物を買って来て家で食べてきた若い女性が母親になって、例えば、離乳食を皿の上にパカッとあけて、床の上に直接皿をおいて、子どもに離乳食を与えているという話も聞きます。暮らしとはなんだろう？と思います。

みなさんがやっていらっしゃる産後ケア、子育て支援によって暮らしを整え、セルフケアができるお母さんを育てていく。精神的に肉体的にも、社会的にもしっかりと自立した人たちが、社会に復帰していく。そういう人たちが社会にどんどんどんどん増えていくことで、企業自体も随分変わりますよね。

産後ケアというのは、産後だけの一時のことではなくて、地域に関わるチャンスを持って、赤ちゃんへの声かけもわからないのであれば、それを知ることで人に関わり、人を信頼して、社会に戻っていく。石山さんが言っていたように、生きることにつながるんです。

安倍政権が言っている「女性活躍」。男性と同じように勉強して、男性と同じように働く。男性と同じような思考を持ってトップリーダーになっても、状況は何も変わらない。そうではなくて、市民として人と触れ合っていて、信頼しあって、社会に戻っていくことが大事なんです。今、お二人のお話を聴いていて、女性はお産によって、それに気づくことができる。男性はかわいそうなことにそれに気づけるチャンスがない。男性の働き方、男性にも暮らしを整え、地域につながるチャンスを与えてあげないと。現状は退職した後になっています。

今、よく言われている「ソーシャルキャピタル」とは、信頼とお互い様というネットワークのこと。このソーシャルキャピタル率が高い地域は、老人介護率が低くて、出生率が高いというのがデータで出ています。この、人を信頼できて、お互いさまだね、と言えるネットワーク、ソーシャルキャピタルをつくるのは、まさにこの活動（産前産後ケア）ではないでしょうか。「母子の愛着形成」。それをサポートしてもらえらる時間、環境を支えてくれる人がそこにいる。暮らしを整える。

キーワードは「愛着形成」、「暮らしを整える」、「ソーシャルキャピタル」ということだと思います。

先ほども言いましたが、男性の働き方、男性にも暮らしを整え、地域につながるチャンスが必要です。なにより、人生が豊かになります。大きな病気になってから気づくかもしれませんが、それはその後の人生が大変なことになってしまったりしますよね。お産のように、誰にでもあることで気づく。もちろんお産そのものが、その女性にとって大変な危機でもあります。お産によって、その後の人生が大きく変わる。菊地栄先生がどこかで書いていらしたように、コペルニクス的大転換がお産のときには起こるんです！ そういうときによい転換を起こしたい。5日間の産後の入院では、そこまで気づくのは難しく、地域のピアな仲間と、上から目線ではなく、共に振り返り、よい経験だったと転換してもらい、気づきあえれば良いと思います。

少子化対策、自分たちのまちの少子化対策、どうしたらいい？と悩んでいる自治体は多いはず。基盤は「愛着形成」をしっかり作ること。暮らしをしっかり整え、お互いさまという信頼のネットワークを作る。これがひいては、高齢者対策にもつながるんです。少子化対策、子育て支援と比べると、どうしても自治体の首長さんたちの目は、高齢者対策、介護対策に向きがちですが、今子育てをしているお母さんたちが、やがては介護に向き合うことになります。すぐ先のことです。2020年、消滅してしまうと言われている市町村は、なおさら、子ども・子育て支援、産前産後ケアのことを、きちんと考えてもらいたいと思います。今日このあと参加する、市町村長会議でも今日の話をごひ伝えていきたいです。

# グループワーク「わがまちに求められる 産前産後ケア」

**松田** 「わがまちの産前産後のこと、どうする？」ということをお話してもらいます。

今日は飛行機できている方もいるし、いま発表された、千葉と東京でも大きく違います。参加しているみなさん、それぞれに思いがあると思いますので、その辺をお話し合ってもらいます。

活動資金や行政との不毛な話ではなく、どうやって妊婦さんとながらうかな、という前向きな話にしましょう。始める前に、ひとつ約束、しゃべったことを付箋に書き残してください



## 1. まずは自己紹介 ひとり1分

班のメンバーの名前は模造紙のどこかに書いておく。

ここでは何か話に決着をつけろとか、決まりをつくるわけではない。「わがまちでなにかやってみよう」「(今の話で聞いたことを含め) きっかけはできたけど、つなぐのが難しい」など課題があったら付箋に書き出す。ここで話したことは、ここだけでとどめる。課題として共有するのはOK。

## 2. 5分間 個人ワーク

先のワークで出て来た課題などを、おのおの、付箋に書き出す。(現在やっていることだけでなく、これからやりたいことなど)

**松田** みなさん現場の方なので、課題がたくさんみえて、付箋がたくさんありますね。シェアできるか不安なくらい。

ひとり1枚の付箋出したら、ほうほう、と聞いて、ずっと隣の人に回していく。1つのキーワードは簡潔に。でも共感をもって聞いていきましょう。

## 3. 班のみなさんでシェア

それを実現するために、何が必要か、どうしたらいいか?が浮かんだら(行政まかせにしない)、さらに新しい付箋を書いて貼り重ねる。

**松田** 『実現するためにすること、必要なこと』に話題を移してくださいね。新しいポストイットで。

各グループで出されたことを発表してもらいましょう。どんな話が出たか、お話しくださるグループありますか? ひとグループ1分ぐらいをお願いします。

## 4. シェアリング—実現するためにすること、必要なこと

**参加者1** 行政をいかに巻き込むか? 大事なのは、あきらめずに、行政の中にセンスのいい人を見つける。行政頼みだけでなく、企業を巻き込んでいくシステムづくりも今後必要ではなんでしょうか?

**参加者2** シングルの方が参加しやすい場をつくりたい。外国籍の方が参加しやすい場を、周りが理解出来る状況をつくりたい。シングルの方、外国籍の方、妊娠中や産後で育児をしている方がよく行くコンビニやドラッグストアに情報を置けないか? おむつに何か貼ってもらえないかとか? 企業にいうと、「上に聞かないと?」となるので、にっぽん子育て応援団でどうにかできないか?

**松田** 柳澤先生にお力を戴きたいところですね。よろしくお願いたします。

**参加者3** 赤ちゃんをお風呂に入れるのがとっても大変というお母さんが多いですが、50年前は銭湯に赤ちゃんを連れてきて、銭湯の人にお風呂に入れてもらっていました。消滅しかけの銭湯を利用して、育児中の方に銭湯券を配って、みんなで見合ってお風呂に入れ合う。

**参加者4** 子育て支援で、切れ目を感じる時はどんなとき？ 既存の仕組みがあります。岡山、愛育院さんが進んでいますが。民生委員と主任児童委員さんで支援をやっている方がいます。既存の役割をさらに発掘する。その方々が上手く関わって行く。社会協議会なども関わっていく。親子向けの子育てカフェではなく、支援者側が集まって、情報を共有する場として開催していると聞きました。お互いの支援のことをもっと知っていくことも大事。

**松田** 全員にお話を伺いたいのですが、時間が来てしまいました。模造紙に書き込んだことはそのまま残しておいていただいて、登壇した方々からの話を聞いて終わりたいと思います。

第1部のグループディスカッションでは、写真のように、事例発表者田中さんと石山さん、コメンテーターの福島さん、にっぽん子育て応援団企画委員の柳澤もワークに加わった。柳澤は、第2部でもワークに参加した。



### グループディスカッションまとめ

**田中** 今日はとても勉強になりました。今日お聞きしたことは、流山に持ち帰って活かしたいと思います。ありがとうございました。

**石山** グループディスカッションで私が話したことをそのまま話します。能率、効率だけでない、産後時間が大事。勉強が好きで意識の高い人々に、どうやっておっぱい、ねんねといった普通のこと、外遊びの重要性を伝えればいいかな。その試みとして、自費出版で「nagi」を発行しています。産後のレシピやマザリングベル誕生秘話、産前産後作成シートを1冊500円で販売しています。本日たくさんもってきたので、よかったらどうぞ。子育てはトライ&エラーとか、月を見ようというようなことを紹介している、産前産後の暮らしの立て直し篇というのもあります。よろしくをお願いします。

**福島** 子育てもそうですが、よいものは手がかかります。効率とか能率というところでは考えられないということがよくわかりました。星の王子様の中で狐と話すところで、「やだね、なついてないから」というせりふがあります。石山さんがおっしゃった「なつく」っていいな、人と人が「なつく」関係ができるといいなと思いました。銭湯の裸の付き合いとかもよかった。昭和のよかったところを残して、次に世代に伝えていくのも大事な。「優しさが循環する社会を」というのがキーワードだなと思いました。今日はありがとうございました。

**松田** 短い中で大事な話をたくさんしていただき、みなさんありがとうございました。ここに残って来たことが次に一歩進める何かになるといいなと思います。それがノウハウになっちゃうと、何となく世知辛い話になったりもしますが、今日のこのあったかい雰囲気、これを注入することかなと思います。ぜひこれをエネルギーに各地域で実践を続けていただけたらとも思いますし、にっぽん子育て応援団もその仲介役になりますので、今後ともどうぞよろしくお願いします。

ここで一旦休憩に入りますが、午後も切れ目なく続きます。ありがとうございました。

## 第2部

---

# 子育て家庭を支える 重層的ネットワークの構築

---

事例報告者 NPO 法人わこう子育てネットワーク代表理事 森田圭子さん  
NPO 法人びーのびーの副理事長 だろっぶ施設長 原 美紀さん

ファシリテーター

NPO 法人水戸子どもの劇場理事 横須賀聡子さん  
NPO 法人せたがや子育てネット代表理事 につぼん子育て応援団 松田妙子さん



## 第2部のねらい

ファシリテーター・松田妙子さん

平成27年度から子ども・子育て支援新制度が本格スタートします。市町村が子ども・子育て支援事業計画を作っていて、につぼん子育て応援団では、策定の場に当事者に参画してもらいたい、地方版子ども子育て会議がぜひ作られるようにと各方面に働きかけて来ました。ほとんどの市町村に作られている実態はあるのですが、実際にはどのように動かしているのかというと、ピンキリの自治体があるようです。そんなふうにして、すでに幼児教育・保育などの新しい条例が議会で採択されるなど、各自治体では5年間の計画を既に立てていっているところです。

では、わがまちというところで、どういう人たちがそれを思い浮かべているかということ、とても少ない人たちだけが思い浮かべているのが実情だったりします。思い浮かべて計画を作っていないというのもあると思います。じゃあ具体的にどう動かして行くの？ 第1部でもそういう話が出ていましたけれど、魂を入れるのは誰？ということが必要なと思います。

そういった切れ目のない支援をどうするかということが、具体的に政策になっていることもありますけれど、すでに先行的に利用者支援を行っていて、その担い手になっている方々もいらっしゃいます。利用者支援のための第2部という訳ではないのですが、そういう空気感があるというところで、実際に誰も取り残さない、すべての子どもたちに重層的に関われるとか、ここではずっと抜けてもどこかで引っかかっている、どこかがセーフティネットになるということがあるといいんじゃないかということ、ずっとにつぼん子育て応援団では話してきました。

第2部でも、先駆的にやっていらっしゃる、粘り強くあきらめずにやってきた、いろんな人たちを巻き込んだり、行政と組んだりして地域を作ってきた人たちのお話をお聴きして、また自分たちのことに引きつけて話し合うワークをしていきたいと思います。



## 事例発表

# ピアサポートにこだわり 現場から社会を変えていく



NPO 法人わこう子育てネットワーク代表理事 森田圭子さん



### 和光市の現況

東京の近郊で、いわゆる埼玉都民と呼ばれる人たちが住んでいる街です。

転出転入が毎年人口1割。人口は8万人で面積は11km<sup>2</sup>と、とっても狭いです。それでも出生数と待機児童は多いです。

### 団体の立ち上げ経緯

近くに親戚のいない人が多く、子育て当事者として自分たちが孤立していました。本当に子育て支援が必要な街です。2000年から、一緒にこのまちを子育てしやすい街にと、この活動を始めました。自分たちが取り残されたとか、どうしたらいいかと思っ

ていて、2、3人集まると「こうしたらいいねえ」と言い合っていました。自分たちのために、最初は自助として活動を始めました。最初のミッションは「つくろう子育て支援、自分のために」。

それから4年経って、法人化するときに話し合っていたら、子育ては自分の子どもだけがよくなってダメ、この街を一緒に子育てしていくコミュニティにしていきたいというふうに、年月が経って、私たちが重層的な視点が持てるようになってきたことがわかりました。

今の子育て支援の方針は、「家族が孤立しない街に」。子どもが育っていくのを支える街を作っていきたいということ。具体的には、顔が見えるつながりをひとつひとつ作っていく。乳幼児期から家族が地域とつながる経験ができれば、地域への信頼が生まれる。あるいは、小さいときからその子のことを知っていたら、子どもが大きくなってどんなに悪くなくても、「この子は小さいときは可愛い子どもだったんだ」とつながっていける。そういう街が居場所になることを目指していく。小さいけど、地域に根ざしたNPOを目指しています。

### もくれんハウス

最初は自分たちのための子育てサロンの開催から始まって、法人化したタイミングで、和光市の子育て支援拠点つどいの広場の委託事業を始めました。

その都度、意識的に自分たちを見つめる時間を作って、私たちのやりたいことは何か、常に考えていって、それが積み重なって行って、今のように社会化されていったのかなと思います。

子育て支援拠点の運営は、月1度開催から平日毎回開催と、開催頻度もあがっていきました。とても0歳児が多い場所です。

もくれんハウスはとっても狭いですが、ここに親子二人で来ても決して放っておかれないという、狭いからこそそのよさがあります。

### ピアサポートの視点

私たちが一番大事にしてきた視点はピアサポートです。私たちの、専門家ではないよさ、敷居の低さ、つながれる気軽さというものをとても大事にして来ました。

私たち自身が、指導されたり、いきなり否定されたりしないで受け入れられたかったので、そんな場をつくってきた。ときに言われると痛いことも言われたりするけれども、それがピアサポートだと思ってつくってきました。親が、自分なりの子育てを見つけていこうというプロセスを支えるという意味合いがあって、ずっ

とやってきました。

### 拠点に来られない人、訪問で気になる人を、どう支えるか

子ども・子育て支援事業計画のニーズ調査で、ひろばを利用している人は大体3割。次世代育成支援行動計画のときもそうでした。数は増えたけど、利用者は相変わらず全体の3割です。

調査結果をみていると、友達がいなくて入りづらい、コミュニケーションが取りづらいという人もいます。ただ、遠いとか、私は対象者なのか？とか、行きたいけど行けない人も多くなります。

私たちは拠点なんだけれども、拠点に来ない人はどんなふうに支援されているんだろうと思ったときに、全体をみると、ほかの地域子育て拠点事業に来られない人もいます。

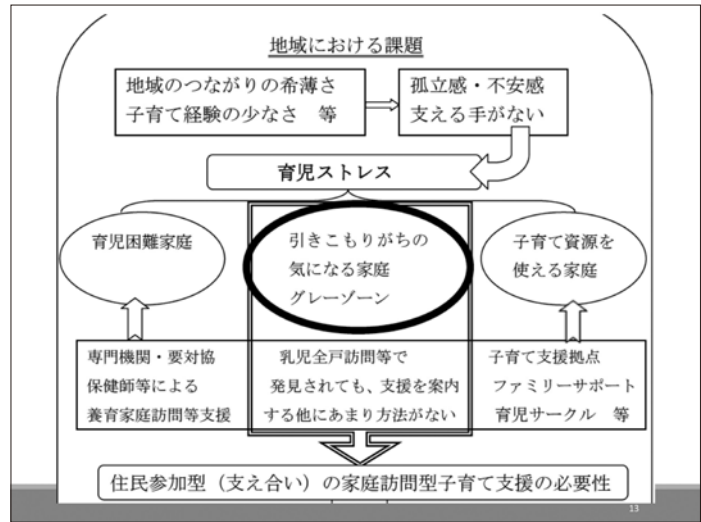
乳児家庭全戸訪問事業は1回きり。養育支援訪問事業はハイリスクの家庭向けなので、来て欲しいひとみんなが来てもらえる訳ではない。ファミリー・サポートは保育で、お金がかかる。

### 当事者の立場から考える視点

育児ストレスは全員が抱えるが、今のしくみの中だと、全員が引きこもりがち。大変な人が使えるものがない。赤ちゃん訪問をしている保健師さんに聞いても、「この人、気になるなあ」という人に出会っても、手を握って「もくれんハウスに行くんだよ」と伝えるしかない。伝えてもきっと行かないだろうなあと思いつつ。

そこで住民参加型の家庭訪問支援、はっきり言うと、ピアサポート型の家庭訪問支援、拠点でやっていることが出前型でできるということが大事なんじゃないの？というの、私たちは当事者の立場から考える、そこにずっとこだわって来たからです。

行政が縦割りじゃなくて、一人ひとりにニーズがあって、それを支えるとなると、入り口は多様でなくちゃならないし。テーマもいろいろ、しかもテーマは隠れているイベントのほうが来やすいとか、当事者の立場からやっていると、つながりやすい。結局つながればなんとかなっていく。



### 多様化子育て支援

選ぶのは家族だ、私たちが準備したものに必ずしも来るわけではない。「なにがやりたい？」「私はこういうことがやりたい」という当事者の声の実現できるよ、というのをやってきたんです。すごくいっぱいいろいろなことをやっています。

多様化子育て支援。冒険遊び場やパパグループ、特性を持つ子どもの親の自助グループ「亀の子」というのを設立したり。面白い名前がグループができたって、お母さんたち喜んだりね。

団体として拠点を持って見えてきたのは、やっぱり訪問型がほしいということでした。これは、もくれんハウスをやっていくなかで、いろいろな理由で来れなくなった親子がいた、悲しい事故があったというのがそのきっかけです。

### 訪問型子育て支援 ホームスタート

ホームスタートは、研修を受けた地域の子育て経験者が、オーガナイザーなどのケースマネジメントなどのサポートを受けながら定期的に、だいたい4回くらい乳幼児家庭を訪問し、友達として傾聴を主とするボランティア活動です。利用者は無料、訪問者は無償です。ホームスタートとは、それを安全に行なうための地域主体の活動のことです。

一緒に出かけるとか、友達がすることしかしない。引きこもりがちの人がしゃべることができる。ピアサポートで、迷っていることを「それでいいんだよ」と先輩が受容することで、ネグレクトを助長しない、という特徴があります。一方で、重篤な問題に対応できない、家事の肩代わりはできないという弱みもあります。ピアサポートってやはり限界があるので、だからこそ、それ以外のことでいろんなところと一緒にやっていく。

地域行政と連携しながら訪問を始めました。保健師さんは、事業になる前から一緒にやりましょうと言ってきて、あかちゃん訪問時にチラシを配ったりしてくれたり、ほかの事業と連携したりということもやり

ました。

対象家庭で手を上げてくださった方が、私たちが届かなかった人でした。問題が解決したなんてことじゃない。背中を押してもらえた、最初の一步が踏み出せた、ほんの些細なことだけれども、気持ちが少し前向きになれたという、感想が多いです。ピアサポートというのは、その気持ちを支えることにおいては、専門職よりも力を発揮します。こういうことがあって、ようやく療育のほうへ踏み出せたというおかあさんもいらっしゃいます。

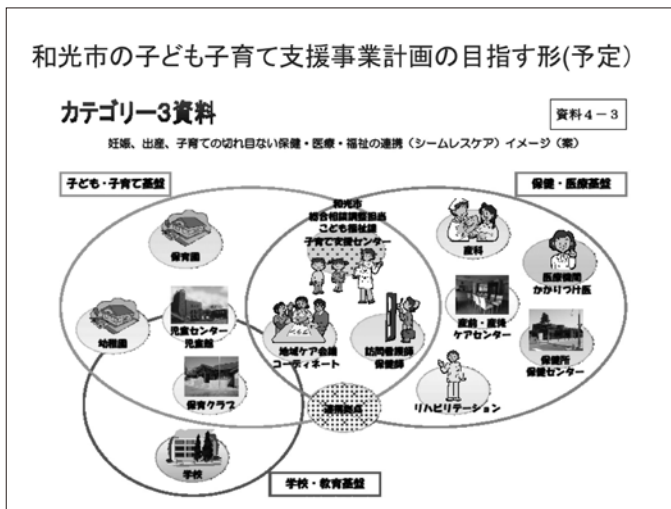
### 自主事業から制度化へ

自主事業から始めたわけですが、これやっぱり和光市には必要だよと、平成 21 年から助成金を取りました。平成 22 年、23 年のときには内閣府の新しい公共の事業ということで助成金をもらいましたが、単独の団体では取れなくて、埼玉県の大学や地域の取り組み団体や、地域の自治体を巻き込んで、協議会に入ってもらって取りました。一緒になってやってみれば、みんな同じ課題意識を持っているんですね。そうやって 2 年間、この協議会を動かしてきました。

この助成金が切れる平成 25 年、これやっぱり和光市には必要だからと市から言ってくれて、私たちが応募する形で和光市の事業になり、今年から子育て支援事業計画に落とし込まれて、通常事業になりました。政策提言をした結果、それは行政とミッションが共有できたから、実現したと思っています。(写真 図)

### 行政と NPO との連携の構築

自分たちでできることには限界があって、それを自覚しながら連携を構築していく。仕組みづくりという地域連携が必要だと思っています。行政の施策は法律と計画に則り、計画はニーズ調査に基づく。これは、税金使っているから必ずそうになっているのが見えて来たので、いろんな計画策定にうちの団体から参画させてもらって、現場で聞いた声を発言したりしています。こういう人たちがいるよということを伝える。計画に字に書かれること、議事録で書かれることに意味がある。



### 和光版ネウボラ

行政のほうもちゃんと考えていて、包括的にやっというということで、第 1 部のコメンテーター、福島富士子先生の意見も取り入れてもらって、ネウボラが始まりました。

ネウボラというのは、この 10 月に始まった産前産後ケアです。産院を拠点にして、産前産後ケアと子育て支援を結びつけようとしています。地域子育て支援拠点で母子手帳の配布などが始まったり、保健師さんを置いて、妊娠前からリスクの高い家庭をスクリーニングすることなどを始めました。そこに、既存の子育て支援のプログラムがどうか変わっていくのかは、まだ未知数で、そこに、民間と官民が結びついていこうとしています。

### 現場が社会を動かしていく

ホームスタートも、自主事業として始めて、子ども子育て支援事業として必要だと位置づけられました。子ども・子育て支援新制度に漏れているもの、必要だけれども地域にないものとして、冒険遊び場もやっています。子どもの育ちを支える遊び。これも地域の中でやっぱり漏れてしまうところがあります。8 年間の実績を積み重ねていて、次年度から事業に乗っていかうとしていて、私たちの活動、現場が動かしていくことが社会を動かしていくというところで、15 年間のこの活動をようやく言葉にできるようになって来たかなと思っています。

あとは、学童期から思春期以降の子育てに関するサロンを、デイケアセンターなどを借りてやって行こうかなと思っています。

# ひとり一人と伴走するために 地域福祉の担い手をつなぎ、 環境＝ネットワークを作っていく



NPO 法人びーのびーの副理事長 だろっぷ施設長 原 美紀さん

## 横浜市の現況と「びーのびーの」

横浜市の人口は370万人くらい。18の行政区に分かれていて、港北区の人口は35万人で、年間に3400人生まれています。まだ微増しています。2025年くらいまでは増えていくと言われているので、少子化という感じではなく、待機児童数では注目されています。

みなさんご存知のように、NPO 法人びーのびーのは「びーのびーの」という子育てひろばと、横浜市港北区地域子育て拠点「だろっぷ」の運営を行っています。

横浜市では、18区それぞれに1カ所ずつ地域子育て支援拠点があります。これは次世代育成前期プランに位置づけられていて、当初5年で整備する予定だったものが、少し時間がかかりまして、7年かけて18区に整備されました。港北区地域子育て支援拠点「だろっぷ」もそのひとつです。

「だろっぷ」という名前は公募で付けられたもので、カナダで言う「Drop in」。だろっぷのキャンディの色のよういろいろな個性が集まるところという意味です。各区の地域子育て支援拠点はどれもユニークな名前がついています。さらに、横浜の地域子育て支援拠点には、共通の六つの柱からなる要綱があります。なかにはファミリー・サポート事業のコーディネイト事務局もやっています。

地域子育て支援を担って来て10年になります。いろいろな事業を担って来たなと思います。年次でいろんな進化をしてきたな、6本の機能でも足りないなと毎日思っています。場がある、ひろばがある、というのは大きいです。これだけ子育て支援が高まっていく中で、つどいの広場やサロンも含め、やっぱり場があるというのは強みだと思います。この場をどのように生かしていくか。まだまだ「びーのびーの」でも「だろっぷ」でも到達出来ていないと私は思っています。

## 場＝環境があるという強み

10年経っても、まだまだ子育ての負担感があって、閉塞感がぬぐいきれず、児童虐待という悲しい事件が起きています。これだけ全国的にひろばができてきたので、私がか子育てしていた時代と比べて、一步出るといった感覚は、みなさん生まれながらに持ってこられていると思います。じゃあ、場のほうはどうなっているんだということ、まだまだこれからなんだと思っています。

ひろばという、親子にとって場の強みは何かというと、みなさんも実感していらっしゃると思いますが、場が連続で見られる。継続していく。親子の多面性、日常の姿を見ることができ、相互性が出てくるということです。それらを俯瞰していくと、今後利用者支援を始めていくに当たって、これらは原動力だと思っています。この切符を持ってどれだけ進化させていけるのかというのが、今後10年、20年ひろばをやって行く中の要になっていくだろうと思います。

ひろばという一番身近な場所として、入り口の間の広さと深さを兼ね備えている。そこで相互性とか関係性に関与していく。母子そのものに直接的にやっていくのではなく、その人を取り巻く関係性にどうアクションして行くかというのを、両輪として見えています。それができるのが、私たちの強みなんだと思っています。

環境からアプローチしていくという視点を常に置いておきたいなと、私もスタッフも思っています。母子そのものとか、親子をダイレクトにどうこうしていくというのは、ときに専門性が高かったり、医療の領域だったりする。でも私たちは周辺も日常も見えている。そこにどうアクションしていくか。そこは見失ってはいけないところだと思ってひろばを運営しています。

## 関係性へのアプローチ

ピアな関係の当事者性。当事者性を兼ね備えた専門性ってどういうことなんだろうというところを、私た

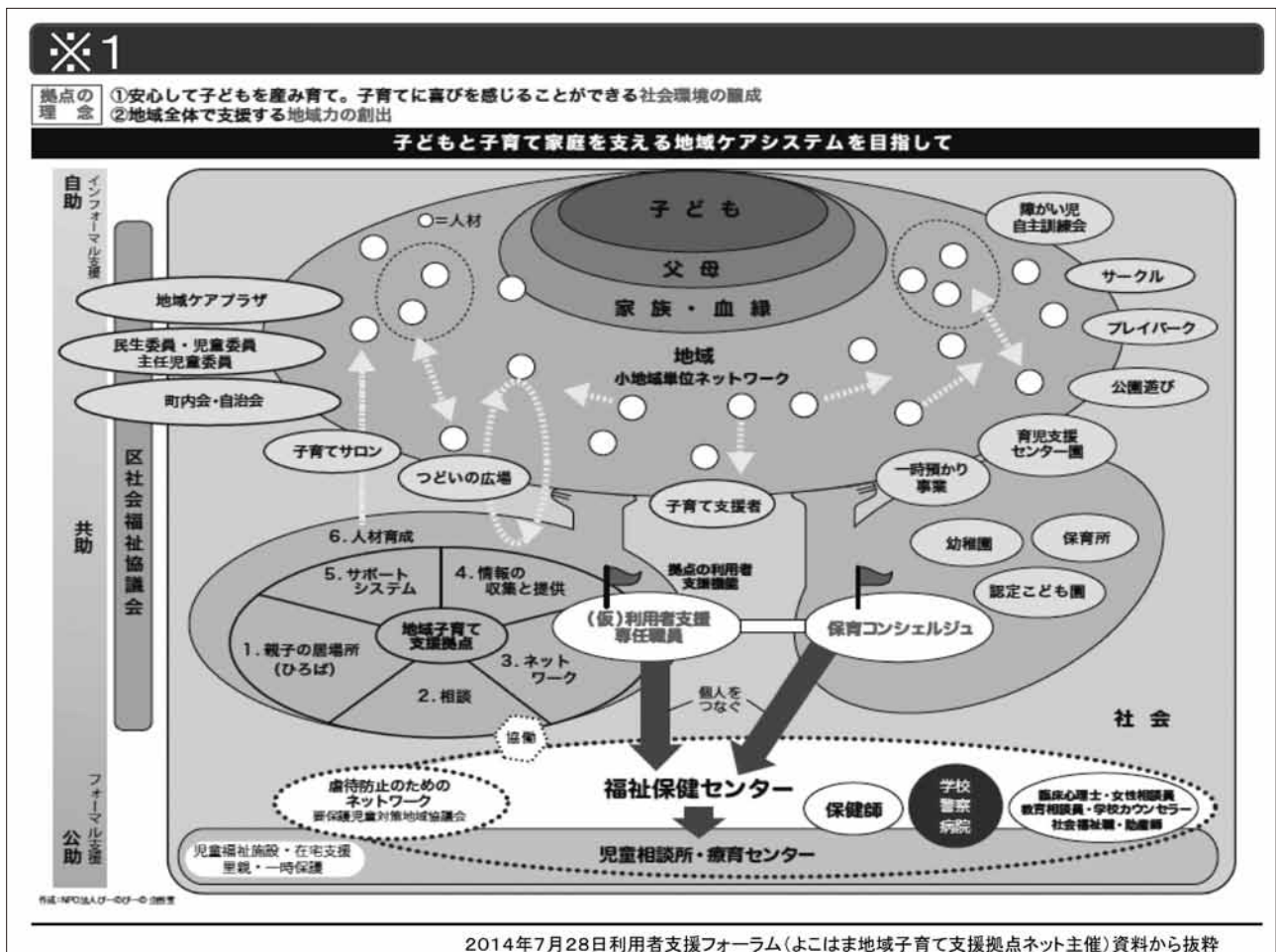
ちは毎日検証しているんだと思っています。一日一日の振り返りとか、親子と「あれでよかったのかな?」「こうじゃなかったかな?」など反芻的な関わりを持つということは、立ち上げ当初からずっと大事にしていることです。何が今の自分に必要は思考回路なのかというのも、年度や月間で検証したりしています。これはその親子には伝わらないかもしれないけれど、その親子と接した時間、自分がどう感じたか、何を拾ったかというところを、その人との歴史を、残しておくのが大事。多様性、多面性というのかな、関わったスタッフ分の自分たちの記録にも、記憶にも残していくことが、場を持つ私たちの務めだと思います。

母子そのものではなく、関係性にアプローチしていくというのはどういうことか。利用者支援事業がモデルで、横浜で始まると決まった今夏にフォーラムを自主開催し、自分たちで提案していたものでもあり、子ども・子育て会議、利用者支援のあり方検討会でも利用者支援事業のガイドライン案が出されていますが、有識者の会議の中だけでなく、実践現場からも考えることが大事です。

### 環境に働きかける

これは（下の写真）、WHO エコロジカル・モデルとって虐待防止のための一般的な図を参考に作っています。ここではすでに母子に働きかけるというのではなく、周りの人たちに働きかけて、伴走者をどう増やしていくかという感覚になっています。最終的には、ひとりひとりの福祉人材をどうエンパワーメントしていくか。これがすごく大事。日々ひろばに来て、5年、6年という長いおつきあいになっていきます。その人との関わりの中で、この地域の中で、地域福祉人材として、どう回遊させていくことができたか。これが地域の拠点でやってきたことの成果だと思っています。

地域資源、地域ネットワークというところで、児童関連施設だけでなく介護施設や障がい者施設などいろんな機関がありますが、機関とつながるんじゃなくて、機関と機関を回遊する人をどれだけ増やしていくかが大事です。横浜では、保育の利用調整は保育コンシェルジュにお任せする。子育て家庭に身近な場所での私たちが連携して、どう地域の福祉人材を、地域で子育てに関心をもつ層を作っていくかというところ、これが今日のテーマでいう「重層的支援」につながるのではないかと思います。



2014年7月28日利用者支援フォーラム(よこはま地域子育て支援拠点ネット主催)資料から抜粋

## ふたつの事例から

みなさんの中でも、こうした事例がたくさんあると思いますが、日々のやりとりを振り返りながら、自分で支援過程を体得していくのが大事だと、ときどきこういう整理をやっています。相談ひとつ付けるにも、1年かかることもあります。場で受けている相談は予約に行く相談でなく、向こう側も自分の内面を話せる場所やタイミングを選べるということです。いつ相談を持ちかけてくるかわからず、判断をその都度求められる。いつ何時という引き出しをたくさん持っていないといけないし、現場に関わるスタッフのパワーはすごいんです。

### <事例1>

ひとつめは、お子さんが1歳半で来館してから、この人が日常的なやりとりでどう関わっていくか、見守っていました。東日本大震災のときは父母分離で住んでいて、任務が終わって夫が帰ってきて一緒に住むようになりました。ところが夫は、0、1歳のかわいいときと一緒にすごせなかったというストレスから、精神的な暴力が始まりました。本当は仕事のストレスにプラスして夫へのケアが必要なんです。横浜では、こうした目に見えない圧力が多く、夫婦問題になっていくことが多いです。どんなことでも、なんとなく起因は夫婦にかかっていきます。第一は夫。子ども、妻に対してスタッフがどういうアプローチして行くかを考えます。直感でやって行くしかないことも多いですが。

このケースでは、お子さんが通う認証保育園（今は直接契約出来る）の園長といろいろやり取りができるので、夫に間接的に関与していく、というアプローチになりました。母親自身の居場所や肯定意識を持てる居場所として、どういうプログラムに誘うのがいいか考えながら関わって行きました。立て直しというところでは、自分から定期的に相談にくるし、このおかあさんは力のある方だなと思います。自助団体を紹介するなど、今でも続いているケースです。

### <事例2>

次は、進行性の発達障がいのケースです。久しぶりにこの方がいらしたとき、「まだ小学3年生なのに」と、これは怒りました。やっと入った養護学校で、中高生の居場所がない、就職はどうしようと、高校卒業後の行き先を探しておいたほうがいいのかという講座が、学校であったというのです。親御さんは気にかけていらっしゃる。今この子といる時間を、親御さんは、この子との時間を楽しむことができず、常に先に先にと手立てを考えながら過ごしていかないといけない。この方とは、10年の付き合いがあり、この間に障がい受容があり、伴走しながら、その子なりの発達の伸びしろを喜び合える関係を築いています。

保育園に入所した後も、母の就職を支援したり、学校に入るときの学校支援員をチームでできる人を3、4人見つけたりしました。行政機関の相談に関わるときでも、インフォーマルな関わりがないと絶対に成立しない。子どもの保育の手当もしなくてははいけないし、フォーマルなことを成立させるためには、伴走者も必要なんです。

## 人と人をつなぐ

抱え込まないようにするのも専門性ですし、伴走して忘れないようにするのも専門性です。「補完の原則」で、フォーマルとインフォーマルの支援は両方なくちゃいけない。機関でつなぐのではなく、機関の人につなぐんです。その人に託しておく、というのができること。場所を知っているだけではなく、人と人をつながないでいく。チームをつくる、託しておく人をつくる。それが次の人のためのネットワークにもなるんです。「ありがとう」を言わせないサポートがしたいと思っているので、これだけの関係性を、その人のためにつくったようでも、次の人にも役立っていくという感覚です。

重層的ネットワークとは、地域福祉の担い手を作ること。担い手には定義はなく、町内会や床屋のおじさん、誰でもそれになり得る。10年やっていますので、こういう案件があれば、託せる相手の顔が浮かぶ。顔が浮かぶということが、重層的なネットワークでのキーワードです。そういう人を、引き出しとしていっぱい持っていることが、スタッフとしての安心感、自信につながってくるかなと思っています。誰かが駆け込んできたとき、その方のある部分は弱っているけどある部分長けている、その長けている部分をつないでいくのを忘れないのがネットワークづくりでの大事なことだと思います。

# グループディスカッション 「わがまちに求められている 重層的ネットワークとは」



NPO 法人水戸こどもの劇場理事 横須賀聡子さん

**松田** 今までのお二人のことを伺いながら、コミュニティワークを勉強している横須賀さんにコミュニティワーク用語を説明してもらいます。

**横須賀** 私は何もしてなくて、役に立つことはしていないのでどちらかといったらお世話になる係をしていて、支援者側には回れない立ち位置です。コミュニティワークを学んでいて、エンパワメントというのをベースにした関係の構築というのを中心に活動しています。

コミュニティワークはソーシャルワークの一部で、レイヤーで切って見ていくということを行います。森田さんの話は、スタートのところはミクロ支援を行っていて、メゾになりマクロになり行政の政策に関わるようになる。社会支援の洗い出しをひろばの人はやっているけど、自分たちの周りの支援も使える。ミクロのところでは使える支援がマクロで使えることではありません。自分が持っているものをそういう風にとらえるのもいいかな。実践のなかには実践があるんだなと思いました。

ピアサポートへのこだわりは、コミュニティワークでも一緒です。当事者がその人の力を発揮できるかどうか、目指しているところ。なぜなら、やってもらったときにエンパワーされるのではなく、役に立ったり、「ありがとう」と言われたり、働きかけて何かが変わったり、ということで影響が出たことでエンパワーされるからです。今エンパワーされているのは、支援者なのか利用者なのか。当事者性やピアであるところを大切にしています。

このあといろいろやっていくので、みんなで話し合いながらやっていきましょう。さっきのグループに戻って、事例報告をしてくださったおふたりへの質問などをグループで話し合ってください。

## グループディスカッションとシェアリング——その1 事例報告振り返り

**松田** お二人に聞きたいこととかあったらシェアしたいのですが。

### 新しいしくみづくり——和光版ネウボラ

**参加者** ネウボラについて。同じ方が継続してケアしてくださる産前産後ケアとうかがっていますが、同じ方というのが、ケアの方が女性の場合、妊娠したりキャリアチェンジしたりで状況が変わった場合、どうなるのでしょうか。

**森田** これは10月から始まったばかりで、実績の上からは申し上げられないのですが、イメージとしては同じ人が同じ人というよりは、母子手帳を取りに来たときに、専門職の方たちとちょっとお話してつながっていく。信頼できる人につないでバトンタッチしていく。和光版ネウボラは全過程ではなく、リスクの高い方をみっちり公助として支えていきます。多くの方に向けてやっている支援とはどうつながっていくのか、まだ見えていません。しくみが変わっていくときというのはこういうものなので、今はまだ見えていません

**松田** 和光市って平均年齢39歳だし、出産する場所がなく、市外に出て出産する場所が多いところなんです。そんな流れの中で、子育て支援とお産の溝を感じていましたが、自分たちがどこにいるのかまだわからないけど、それを探っていくプロセスの中にありますよね。



**森田** 担当部長と勉強しようと、官民で話し合おうと思っています

### ホームスタートの担い手養成

**参加者** 和光市のホームスタートで訪問役でお母さんがいくのはいいな、と思いますが、そのお母さんはどうやって探していくのですか、

**森田** ホームスタートはその仕組みも含めてなんですが、8日間の午前午後の研修があります。守秘義務や「家族って何だろう」とか、傾聴の練習とか、ホームスタートのやり方について学びます。

先輩としていくときに、ピアサポートって、「私もこうしたから、あなたもこうしろ」という押し付けは虐待にまっしぐらになってしまうので、そういうことに気をつけることを学びながら、無償であることを理解していただき、学習会を広くやっています。一回の学習会で養成できるのは20名弱。少しずつ地域にBANKして増やしていく。

### 活動の原動力は何？

**参加者** 生協に勤めていて、枠組みに守られて支援している状態ですが、みなさんは枠組みに守られず自主的にやられて社会を動かしているけど、その原動力はなんですか？

**原** 難しい質問ですね。

さっきKちゃんのことを話したと思います。原動力とは、自分は怒りだと思っています。活動をしていて「どうして？」って思う人いっぱいいませんか？そこですよ。NPOなので、当然「たった一人のためにも」という感覚は持っています。拠点は委託事業なので公的支援センターの一角ですが、公であるというのはどういうことか、というのは話し合っています。公金でやっているの、金庫と個人情報以外は基本的にすべて開放。バックヤードにも利用者は入ってくる、支援の中身もパブリックだから、誰でも入ってくる。公金だからこそ、誰でも入って来られる。公金だからこそ、「ひとりの人のためにやっている」という怒りが大切。忘れた頃に不安を抱えて帰ってくるんです。抱えた方の将来見通しは「実はまだ、こんななんだ」と思うと、これでは終わりが絶対ないし、隙間から漏れてしまう人もいるし、不全性を感じて生きている生活者がいること、それが原動力です。

**森田** しょっぱなが自分の課題でした。当事者が自分。自分がほしい場所がないというのがスタート。自分のほしい場所をやってみたら、40組も来ました。「これ、やめられない」と思いつつやっていたら、世の中が変わっていく。そしてやり続けています。

わが子をよく育てたいと思っても、わが子だけ良くてもだめ。地域が大切と思って、自分が生きて死んでいく地域、子どもが育って巣立っていく地域、これが面白いなと思ってやっています。お金には替えられない。地域のお子さんとか人が気にかかる。ずっと続くまちづくり。ずっと、とにかくやっていく。これが枠組みのなさなのかな。

### 地域全体の課題には地域の機関のキーマン同士をつないでいく

**参加者** 原さんに。機関と機関を介入する人が大事とあったが、どういう人が介入しているのか教えてください



さい。

**原** 例えば、障がい児の親の会があり補助金をもらっている団体もあるし、ダウン症や肢体不自由の会とか課題別にグループをたくさんサークルでやっている人もいる。療育とか勉強会とか親同士で泊まりに行くとか、自主訓練会が全国にあり、子どもの保育が必ず必要な時間があるんですが、その担い手となる保育グループがないというのが、わが港北区全体の問題です。地域包括支援センターの地域コーディネーターさんも社会福祉協議会も、みなさん問題だと痛感している。障がい児の親たちの勉強会の保育を担える人がいない。兄弟児の預かりの担い手がない。いつも決まった人ばかりで、新たに手が挙がらない。結局、民生委員さんに動員がかかる。機関同士がシナリオを描いて、それに手を挙げていく一人ひとりの人材に、こちらで声をかけていく。それぞれの機関にいるキーマンを、相対的にグループ化して間接的にサポートしていこうという動きをやっていきます。これを1年半くらいやっていて、すべての子どもたち対象とか、試行版をやらせていただいて区民の声を拾ってプログラムを作っていますが、機関だけじゃ賄いきれない隙間を埋める人材を、目星をつけて声をかけ、仲間を連れてきてもらってやっていきます。ひとつの課題に対して、「あの人がいたら」という人材に声をかけていく術をプランにしていこうということです。

**横須賀** 参考になる話をたくさん聞いていただきましたが、こういう活動がこういう風につながっていけばいいよね、という一方で、私は本当にできるのかな、自分でできるかな、と思われる方はいないですかね？

目指すところは見えた。じゃあどうするの？ということをし少し考えてみたいな。

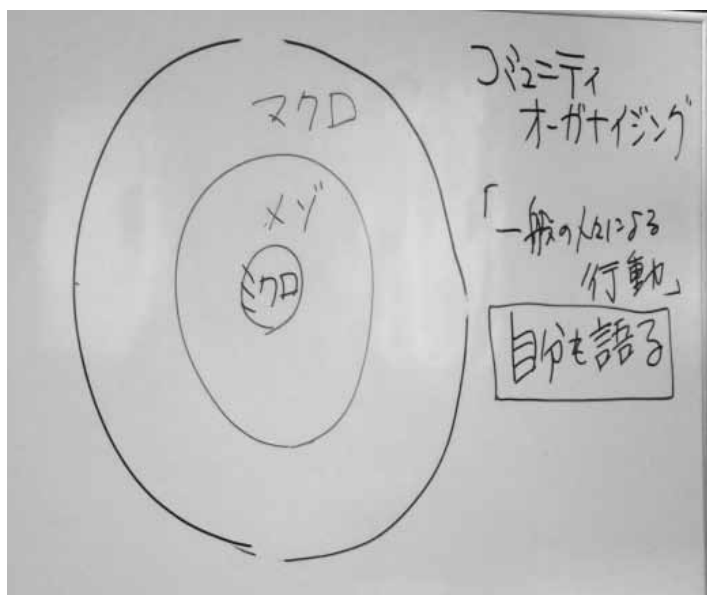
モチベーションはどこからですか？というのはいすごくいいヒント。

米ハーバード大学の講師、マーシャル・ガンツさんが来日して、コミュニティ・オーガナイズングというのをやりました。私はコミュニティの一般の人々による行動というのの原点だと思います。コミュニティ・オーガナイズングというのは、「自分が伝えたいことを相手に伝えて、その相手も一緒にその目的に向かって行動してもらおう」ということなんです。

## グループディスカッションとシェアリング——その2

### 「私はなんでこれをやっているのか」

**横須賀** 先ほども「担当者を捕まえてやっていく」、という話がありましたが、大事なのはどうやってその担当の人を捕まえるか。コミュニティ・オーガナイズングで大切なのは、「自分を語る」ということが入り口。「なんでこれをやっているのか」ということが大事。時間をとるので、A4の紙に「私はなんでこれをやっているのか」ということを書いてみてください。



なんでトレーニングに注目が集まったかと言うと、マーシャル・ガンツさんはオバマの演説に関わったんです。みんなが今困っていることを語る、どうあったらいいか、どういう未来がいいか、ということを見せる。そうやって、コミュニティ・ワーカーだったオバマを大統領にした。

私たちが活動するとき、ミクロ、メゾ、マクロとレイヤーを変えるということを言いましたね。私のことに近いミクロの支援をする人は絶対数いて、そこに必要な社会支援、ミクロに有効な社会支援がある。社会支援がどこに有効なのか頭の中に置いておく。どこに使えるのか。ミクロの支援をきちんと保障していくには、マクロの支援を保障していく社会支援をしていかないと保障は難しいし、それを上手にマクロの

社会支援とつないでミクロを活用している。お二人の話にはそうした要素が含まれています。

ミクロとマクロにわけてその関係性、そのつながりをみていくというのはどうでしょうか。

みなさんの活動を次のステージにつなげていくため、安定させるため、お二人の活動を分けてもいいし、自分の活動をミクロとマクロに分けて考えてもいい。単純に個人的なミクロの社会支援とマクロの社会支援と

いうのを円のなかには書き出してその関係性をつないでみるというのをやってみるといいので、どれをやるのかはグループで考えていただいて。

何でも、知っている社会支援を取り敢えず出していただいて、それを分けるというのでもいいです。

どうやってお伝えすると納得されるのかでお伝えしているので、やりたいことがあったら言ってください。やりたいことをどんどん言っていただくと助かります。

例えば、虐待を受けている子どもがいるとしましょう。

ミクロで考えると、近所のおばちゃんがいる。家族やご近所。

メゾでは、児童相談所

マクロは、政策や条例です。

そこにひとつの家族とか子育て支援というところで、日常的に考えているところを分類して事例を想定するのもいいし、皆様が想定した社会支援を書いていただいてもいいです。

**参加者** 社会支援の意味は？

**横須賀** 社会支援とは、その人の支援に役立つ様々なもの。人だったり、企業だったり、制度だったり、人を支えてくれるものです。

自分はどこで動きやすいのか、自分のチームにはどういう人がどの位いるのか、ということ把握しておくということも大切です。

### グループディスカッションまとめ

#### ミクロとマクロをつなぐツボ

**横須賀** 子ども子育て新制度とか、政策とか書かれているけど、もう少し詳しくなると児童福祉法とか、そのどういう枠組みかを考えるきっかけにもなると思います。

私たちの身の回りにあることを考えてほしい。これをやりながら、前のお二人にポイントみたいなものをお話いただけるといいかな。ミクロとマクロをつなぐツボを、こっそりと教えてください。

**森田** ミクロからマクロってマクロ？みたいな。私がびんときたのはホームスタート。

支援に来ていない人がいる。でもいきなりは市も地域もお金は出せない。でも毎年補助金だと1月から8月までしか活動できない。そうなると支援の質というか、必要なときに行けないと意味がない。必要だっていうミクロなものを制度にする（マクロ）取り組みをしてきましたが、地道に助成金をとるとか財源をとるとか、直接のミッションじゃないことを学んで、見通しを持っています。

なんの証拠もない、けれども実績が根拠になります。実績の中から報告書を作って、関心がある行政の人



とか他の支援者の人、議員さんとかに伝える場を作る。個人情報に配慮しながら地域に発信する。子ども・子育てプランとか次世代支援行動計画とかの策定会議に出て行って発言していく。するとニーズ調査に「ホームスタート」という項目が入って、意図したような結果が出てくれば、行政が動く。字面で残る行動をとらないと動いてくれません。9月議会には決算と予算の審議があって、3月にどちらも決まるという流れを理解して、前年に作った計画に載せて担当者と相談して議会の前に動くとか、そういう流れを勉強しました。実現したいことを実現するための勉強も必要でした。

**原** 森田さんに行政施策的な流れを教えていただいたので、ミクロからマクロへのイメージをもっとベタな感じで伝えると、どうやったら介入する人材を育てられるのかという質問にうまく答えられなかったのもう一度、話してみます。

ミクロの関係は10年経って“ここ”と“ここ”みたいなのがわかってきました。例えば「どろっぷ」の水遊び。子育てにチカラを貸してほしいなって思ったときに、元旋盤工だったり元大工さんだったりした人が、ご自分の持っている技術で、「どろっぷ」の水遊び場づくりを、今夏手伝ってくれました。それぞれの人にそれぞれの特技があって、簡単などころでも手を貸してくださる。それを接続するという、失われた昔の子育て環境を作る地道な作業ですが、相手を信じるのが基本です。

制度施策の提言においては仮想でデザインしていく。そこに何をよるべにしていくか。それはそこにある人を信じて、きっと答えてくれる、きっとわかってくれるって。それは親子だけではなく、そこに介入してくれるすべての人が主体で、その人たちを巻き込んでムーブメントを作っていく。必ず地域ではその人が発揮できる場がある、というのを丁寧にやっていくのが私の役割だと思います。

地域子育て支援の地域はカオスでなくてはならない。「どろっぷ」に来て、門に入ってよかったって思う人もあると思うけど、門を入れてそこからは地域のカオスで、ひとり一人が当事者です。ミクロの一对一のベタな関係がマクロにつながるっていくというシーンを見させてもらう、記帳で楽しい体験を、現場でたくさんさせてもらっています。

昔ながらの子育て環境を再生していくような地道な活動ですが、みなさんとこれからもやっていっていききたいと思います。

**横須賀** しみじみしちゃった。皆さんの感想で終わりたいな。

「Yes and で前の人をのいっただけを否定せず子育て支援を一言でいうと」をやっていただきましょう。中が見えない状態でカードを引いて、「子育て支援って何ですか？」から始めてください。(例:「しかし」のカードを引いたら「私にとっての子育て支援は〇〇です。しかし」とつなげる)

思考をやわらかくするために有効なカードです。人間は思考が大体決まっているけれども、このカードがあると普段自分が使わない接続詞を使わなくてはならないので思考が変わる。マンネリ化している会議などで使うといいですよ。



**松田** こんな短い時間で語り尽くせない。

「重層的に」って、主催者側がつけたタイトルです。「できてない、できてない」と呆然とするのではなく、俯瞰しながら仕掛けていく人材になっていきましょう。みなさんは、既になっていっていると思うので、これからもつながって一緒にやっていきましょう。

制度作る人たちが、みなさんの後からついてきたと思うけれど、作られたものに追いついていかなくはいけない市町村もあると思います。

セミナーでやると意識が高い人の参加が多いから、いい意見があるけれども、街でやるのは大変。でもこれをやっていくことで、変わっていく。これからもがんばっていきましょう。

## 閉会のご挨拶



にっぽん子育て応援団企画委員 日本こども家庭総合研究所名誉所長 小児科医 柳澤正義

私は日常的には子どもと家族の医療、保健福祉に関わっていますが、みなさんのように現場で親子と関わるということとは遠いところにいるので、ここで発表された先生方、フロアからのディスカッションをお聞きして、私自身大変勉強になりましたし、最後のカタルタには、なんとなしに参加しましたが、相当なストレスでした。

一日よい勉強をしたと私自身も思いますし、みなさんもそうだと思います。明日からの活動に利活用されることを希望致します。今日はどうもありがとうございました。

# 子育て支援者研究セミナー参加者アンケート集計結果

開催日時：2014年10月24日（金）10：00～16：30

開催場所：主婦会館プラザエフ 9階スズラン

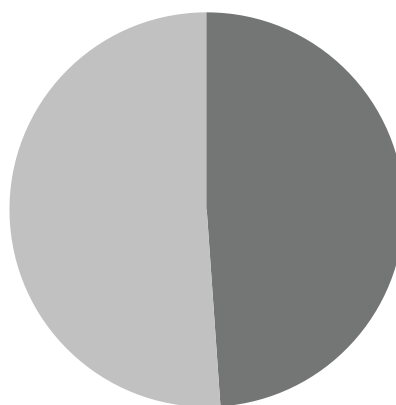
参加者総数 81名（うち保育利用 2名）

アンケート回答総数 45名

回収率 55.5%

## 1. 本日の内容全般について、ご満足いただけましたか

とても満足	22
満足	23
やや不満足	0
不満足	0



## 2. (1.で「とても満足」「満足」を選んだ方) どのような点が良かったですか。

- ・他地域での実践がよくわかりました。自分の「志」みたいなもの、他の方々の気持ちの「源」のようなものに触れたこと、ミクロ的な視点、マクロ的な視的でブレないお話だったのが印象的でした。学ぶこと、考えることが多くありました。時間も長かったけど長く感じなかったです。
- ・事例がすごくヒントいっぱい、早速来年度以降の事業の組み立ての参考にしたいと思います。自分の地域ではやっていないことをしている道標があるので、とても助かります。地域差はあるけれどこんなにたくさんの人たちが目指すところが同じというのがうれしい。これを地域に持ち帰って形にしたいと思います。
- ・いろいろな事例から、自分たちの実践について再考できました。グループワークがあり、同じ思いの他地域の方と情報・知識を共有できよかったです。
- ・ワークショップも参加の他団体の方と充分話せてよかったです。出会えるきっかけをいただけたことに感謝です。「KATARUTA」もおもしろかったです。
- ・午後のセッションのコミュニティワークは、なかなか体験出来ないプログラムだった。今後もう少し時間を取ってじっくり体験し考えてみたい。
- ・地方ではなかなかこれだけのメンバー、人数が集うのが難しい。
- ・最近、活動の課題や何年か後のことを考えなくてはと思っていたので、刺激になりました。

○事例報告とグループディスカッションとも充実していてよかったとの回答が多かった。

## 3. (1.で「やや不満足」「不満足」を選んだ方) どのような点が良くなかったですか。

カタカナ英語を多用するのはやめたほうがいいかもしれません。

## 4. 本日の研究会に参加して、今後、あなたが地域の子ども・子育て支援のために出来ること、出来そうなことを教えてください。

- ・保健師の卵の教育に活かします。自分の地域にも参加します。

- ・まず、スタッフ間でいろいろ自分たちの活動について話し合いたいです。
- ・産前産後のケアを考えてつくる。ひろばにもマタニティの方に来ていただきたい。
- ・まずは一步を踏み出す。その前に現在の事業の棚卸しをして整理する。
- ・妊娠期からの子育て支援事業の内容及び自分の団体のあり方、運動に活かしたい。
- ・支援する人づくりだけでなく、その人たちが活躍出来る場づくりを考えてみたい。
- ・子育て期（出産を機に）に自分の暮らし方を立て直す。それによって自立したおとなになり、また社会に戻って行くという福島先生のコメントは、生協がやりたい活動を重なるので、ぜひそのテーマで企画をしていきたいと思いました
- ・利用者支援がこれから始まります。できることから頑張ります！！
- ・子育て支援に関わるスタッフさんが、日々の活動の中で抱えている悩みや不安を共有出来る場を持ちたい。他の地域資源とつながるために地域に出向いて行きたい。
- ・具体的に地域の方とつながって具体的に出来ることを考えたい。事業計画に今日の参考になった事業を入れて行きたい。細々でも続けていくこと。
- ・地域とのつながりを大切に、ミクロの支援をマクロにして行く。
- ・銭湯利用の子育て支援。ホームヘルプ現場と子育て支援（相談）関係の人との地域コミュニティで連携して行きたい。
- ・近所のおせっかいおばちゃん風であること。また、当事者の視点で、自分より若いママさんたちの話に傾聴し、働きかけていくこと。草の根での存在の仕方。

○活動の振り返り、新たな取り組み、地域とのつながりへの再考を上げる人が多かった。

一般財団法人子ども未来財団 **団** につばん子育て応援団主催 子育て支援者向け研修専攻大規模研修会  
 子育て支援者研究セミナー

## 子育て現場の ケアコミュニケーションを 考える

～地域の子育て家庭に、もれなく寄り添うために～



16:30

日時：2014年10月24日(金) 10:00～  
 会場：主婦会館プラザエフ 9階 スズラン

**プログラム**

子育て支援者研究セミナー  
**子育て現場のケアコミュニケーションを考える**  
 ～地域の子育て家庭に、もれなく寄り添うために～

2014年10月24日(金) 10:00～16:30  
 主婦会館プラザエフ 9階 スズラン

開会のご挨拶 につばん子育て応援団企画委員 柳澤 正義さん

第1部 産前産後のケアアプロローチの実践  
 事例報告者 NPO 法人ながいやま子育てコミュニティなこっこ 田中 由美さん  
 NPO 法人子育て支援グループ amigo 石山 恭子さん

コメンテーター 東邦大学看護学部 福島富士子さん

ファシリテーター につばん子育て応援団 松田 妙子さん

グループディスカッション  
 わがまちに求められる産前産後ケアとは

(ランチ休憩)

第2部 子育て家庭を支える重層的ネットワークの構築  
 事例報告者 NPO 法人わこう子育てネットワーク 森田 圭子さん  
 NPO 法人びーのびーの 原 美紀さん

ファシリテーター NPO 法人水戸こどもの劇場 横須賀聡子さん

グループディスカッション  
 わがまちの課題と重層的な支援のあり方

閉会のご挨拶

プロフィール

事務局代表者

●田中由美 (たなか ゆみ) NPO 法人ながねやま子育てコミュニティをこっこ代表理事  
1975 年大阪府枚方市生まれ。3 歳と 9 歳の 2 男の母。  
母行会社勤務後、出産後 2 週、第 1 子出産後、千葉県船橋市にて地域子育て WEB 掲示板を  
立ち上げ、地域の子育てサークルの仲間と共に NPO 法人ながねやま子育てコミュニティを  
こっこを設立。主に地域の妊婦～産前産後の母親・父親のメンタルケアと支援活動を行う。こ  
っこ、小学五年くらいまでの親子を対象とした様々な体験活動を行う。池田市子ども子育て会議  
委員。

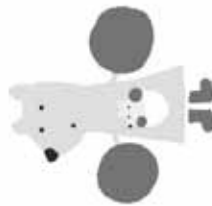
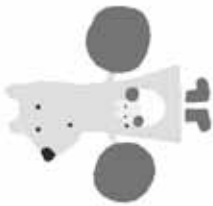
●石山静子 (いしやま しずこ) NPO 法人「子育て支援グループ amigo」理事長  
1974 年、栃木県生まれ。  
大学卒業後、新卒会社に営業事務員として 6 年間勤務。  
2003 年の出産後、ボチボチワーカやフリーランスの働きを始め、子育て支援グルー  
プ amigo のスタッフをはじめから参加を始める。  
出生前診断・産前産後のセルフケア講座、講座、講座、各所で産前産後向けプログラムの講師を  
担い、年間約 2000 人以上の親子と関わっている。

コメンテーター

●福島富士子 (ふくしま ふじこ) 東北大学看護学部教授  
1957 年静岡県生まれ。横浜国の大学大学院看護学専攻修士、博士(医学)。  
国立保健医療科学院を経て、2014 年 4 月から現職。専門分野は母子保健、ソーシャルワークと育児。  
「産科からの産前産後の支援」「産後育児支援体制のあり方」「子育て社会における発達・出産にか  
かわる政策提言」に関する研究を主眼。2013 年、一般社団法人産前産後ケア推進協会を創設。  
著書に「産後ケア なぜ必要か 何が出来るか」(創成ブックス)ほか。

ファシリテーター

●松田妙子 (まつだ たまこ) NPO 法人ながねやま子育てネットワーク代表理事  
NPO 法人子育てこっこ全国連絡協議会理事、こっこなご子育て支援協議会  
9 月 13 日開設。2 男 1 女の母親。  
大学で社会福祉学専攻。独立系児童福祉センター「こどもの城」に勤務。結婚後 2 歳に産後中  
止で帰国を覚悟。2001 年東京で子育て支援グループ「amigo」を立ち上げ、産前・産後中  
止の支援と産後ケア講座  
現在、子育て支援者の養成や地域のネットワーク化に関わる子育て支援コーディネーターとし  
て活動。



第 1 部  
産前産後の  
ケアアプローチの実際

虐待で死亡する子どもの 38.6% が 0 歳児であり、主な加害者の 55.2% は実母。  
また加害者の 42.5% が地域社会との接点がありませんでした。産前産後の困難期を、  
行政と地域がサポートできる体制の実現が喫緊の課題となっています。  
人生のスタート期、親となる人々の立ち上がり期を、いかに支えて行くか。妊娠  
期及び産前産後、新しい命を生み育てるといふだけでなく、親となるうとしてい  
る人の人生にとっても、新たに家族を迎える家庭にとっても、大きな転機期です。  
なぜ妊娠初期からのアプローチが必要なのか、既存の支援メニューでは何がどんな  
ふうに足りないのか、2 つの団体が実践してきた、「当事者から生まれた、当事者に  
よる、当事者のための」産前産後ケアの実践を通して、この時期の課題と必要なメ  
ニュー、当事者へのアプローチの仕方などについて考えてみましょう。  
平成 27 年 4 月 1 日から本格実施となる子ども・子育て支援新制度では、新たに「利  
用者支援事業」が知られます。ガイドライン案によれば、「利用者支援事業」は、こ  
れまでの窓口での相談に留まらず、当事者の課題を評価・分析しながら地域の支援  
メニューとマッチング、個々の実情に合わせたサポート体制の実現を、地域課題を  
巻き込んだ形で展開することを目指しています。産前産後のケアには、まさにこの「利  
用者支援」の視点が欠かせません。



## 産前産後の ケアプロローチの実際

～流山での実践事例から～

NPO法人 ながれやま子育てコミュニティなこっこ



流山の子育てを 共に楽しむ 考える 助け合う 団体です

WITH ママ  
流山

- ・地域子育て情報掲示板
- ・ママ会の開催

+

みかん  
クラブ

- ・親子サークル

↑

フレイクス  
ルーポイント

・助産師との出会い  
・市庁活動の補助金への申請

NPO法人  
ながれやま  
子育てコミュニ  
ティ  
なこっこ

- ・産前産後支援
- ・地域子育て情報の提供
- ・防犯教室
- ・ハロウィンパレード など

## 千葉県流山市の状況(1)

平成17年  
つくばエクスプレス開業に伴い、大幅な人口増加

H16  
15万人

➔

H21  
16万人

➔

H26  
17万人

子育て世帯の大量流入

身近に知り合いや頼る人のいない、  
孤独な子育て世帯が増加

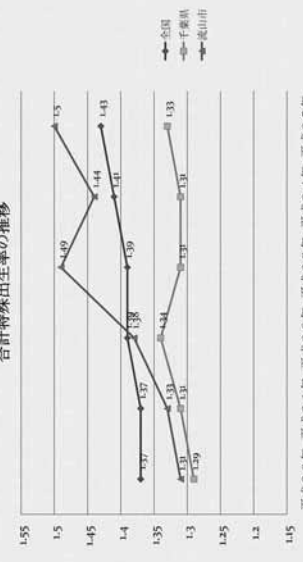
(例)

秋葉原への  
通勤時間  
4.3分→2  
3分

- ・ファミリー向け大規模マンションが  
続々と建設
- ・子育て世代が購入
- ・その多くが都内へ通勤
- ・共働き世帯の増加
- ・利便性から転居層も多い

## 千葉県流山市の状況(2)

合計特殊出生率の推移



年	全国	千葉県	流山市
平成20年	1.37	1.33	1.29
平成21年	1.37	1.33	1.33
平成22年	1.40	1.38	1.34
平成23年	1.41	1.39	1.37
平成24年	1.42	1.40	1.38
平成25年	1.43	1.41	1.38

### なこっこの産前産後ケアアプローチ

- お産Café
  - ・ 妊婦がお茶を飲みながら、子育て仲間づくりをしたり、助産師に相談したりする場の提供。ワンクッションや体操なども。
- 新米ママ講座
  - ・ 子が6か月までの第1子の母親学級の講座。ヒアリングやセラミック的な場の提供と子育て仲間づくり、育児不安の解消を目指す。助産師・栄養士による講義。
- 男がでる産後の準備
  - ・ マタハラと産後パパ向けに、パートナーシップの気づきを目指す。基本、夫婦で参加し男性講師による講義&ワークショップ。
- なこっこBABY
  - ・ 1歳半くらいまでの乳幼児と母親を対象にした親子活動。新米ママ講座の出口として交流の場を設定。

### お産Café

- 対象 : 初産婦&経産婦
- 開催 現在 : 毎月1回(年12回) 平成24年7月～
- 内容 : 助産師によるお産シミュレーション&各種相談  
先輩ママとの産後不安見える化ワーク  
(二人目ってどう? 夫さんの協力は?)  
いきみ迷い・妊婦体操・マッササージのやり方  
ノンカフェインティーと美味しいお菓子で雑談  
お友達づくり  
お古あげます!

### お産Café



自己紹介をしながら情報交換



車座になって妊婦体操

### 産前支援の成果と課題

見えてきた課題

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 産院での過密検診出産 いっしょに産院の検診ができていない状況。 余計な不安や身体を 出産への不安や身体を ひとり抱えている妊婦の存在。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 産後の生活がイメージできた 夫への協力要請や産褥サービス の情報収集をしようと思った</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 妊娠中は「出産することまでで、頭がいっぱい」で産後の生活のイメージが 妊婦が多い。こんなはずしななかった... という気持ちから産後産褥問題になりか ねない。高橋が祖父母の介護等、誰にも 頼れない妊婦の存在。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 友達づくり、情報収集ができた</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子育て仲間がいない。地域にいれば友達 がすぐできる訳ではない。</li> </ul>	



## なこっこBABY



足の踏み場もないほどの賑い



制作物で遊ぶ子どもたち

### 男がができる産後の準備

- 対象 : マタパパ&子育て中のパパ (マタニティカップル&産後のカップル)
- 開催 : 年2回 平成25年3月～現在
- 内容 : 産褥サポートサービスママの代表 渡辺大地氏による講演とパートナーシップをテーマにしたワークショップ (同室&別室保育あり、室内授乳室完備)

## 男がができる産後の準備



産後が怖かった！  
産後ケアの大切さを知ろう



### 父親支援の課題

見えてきた課題

良かったこと (アンケートから)

- 夫に聞かせることができて良かった。(ママ)
- 妻の気持ちを知ることができて良かった。自分が一番すべきことは妻への労わりだと知った。(パパ)
- 産後の生活がイメージできた。お風呂の時間をどうするかなどの課題が見えてきた。(パパ)

見えてきた課題

- 産前産後に子どもの話ではなく、夫婦関係の話や産後の話などについて話さず、産後期の妻の行き違いは、その後の夫婦関係に大きく影響する。男性参加の質(参加意欲)を高める必要がある。
- 育児に参加したい、産褥期に家事を助けてほしいと思っているが、お互いの「育メン」イメージの差によるプレッシャーと求められる夫像、父像の不一致。
- 父親の産後イメージの不在。産後のWLBなどについて考える機会がない。

## 産前産後支援事業の今後の目標

- 産褥〜ルバー事業の立ち上げ
- 1歳半以降の親子の居場所づくり
- 地域の産前産後支援資源や情報の一元化



[事例報告]  
産前産後のケアアプローチ

**NPO法人 子育て支援グループamigo**  
石山恭子

### 石山恭子

10月24日生まれ、今日で40歳

<プロフィール>

- 1974 栃木県鹿沼市生まれ、宇都宮でも育つ。
- 1993 大学進学を機に上京。
- 1997-2002 就職。
- 2000 結婚。
- 2003 出産。
- 2004 子育て支援グループamigoに通い始める。
- 2006 息子が保育園に入る。
- 2007 子育て支援グループamigo代表に。
- 2009 おでかけひろば@あみーご開設。

ア・ユルヴェーダ、ヨガ、ダンスetc...ポディワーク  
産前産後の女性のからだのケアについてです。

→子育て支援とポディワーク(心とからだの繋がりを)を生業とする。

## 子育て支援グループAMIGOについて

「一緒に楽しく子育てしようよ！」を合言葉に、助産師や保育士と連携しながら、子育て中の母親同士が支え合う“育児相互支援”を2001年から実践。2014年に法人化。

**顧問3名・13名のメンバー**

**産前産後プログラム**

- ・マタニティヨガ
- ・ベビーマッサージ
- ・産後ケアクラス

**産後訪問支援事業**

- ・マザリングベル
- 産後1ヶ月のご飯とからだ

**出版事業**

- ・ナギ

附「世田谷トラストまちづくり」  
地域共生のいえ

**子育て広場の運営(世田谷区補助事業)**

- ・「おでかけひろば@あみーご」
- 月～金 10～15時
- 0歳児～一時預かり

**出張型定期講座(世田谷区主催)**

- ・産前産後のセルフケア講座
- 世田谷区5地域の児童館で月2回開催

「はたがひを育てまわつたが」  
世田谷区より委託

## 行政施策と自団体活動の相関関係

**■産前産後のお母さんサポート**

- 産前産後のセルフケア講座

**-さんさんサポート(子育て支援ヘルパー派遣)**

- 産後ケア事業(ショートステイ・デイケア)
- 産前産後歯科健康調査

**■おでかけひろば事業**

- おでかけひろば@あみーご

初回は平成18年(2006年)10月「世田谷子育てカレッジ」として開催。  
月2回、1か所で行えば産後5ヶ月未満。  
→定例も参加可能。  
→平成24年度より5地域の児童館で開催。

自主事業「マザリングベル」の  
仕組みを調査。  
委託事業者むけに研修を実施。

平成16年(2004)  
東急電鉄×amigo×NPO法人マドリポニー  
「産後調理院を世田谷にもつくりたい」  
というセミナーを開催。

平成20年(2008) 世田谷に産後ケアセンターが誕生。

平成20年(2008)開設。  
週3日 10～15時  
一週5日 10時～15時  
一時預かり

児童館や就労支援センターで出張講座やイベントへの出席

## 世田谷区の子育て環境の特徴

**世田谷区の特徴**

人口 約87万人(約45万世帯)  
出生数 7700人  
5つの行政区に分かれ、総合支所が設けられている

**世田谷の子育て環境の特徴**

- 総人口の増加に対し、幼児数、出生数ともに近年増加傾向にある。(平成17年→26年の6年間で6,866人増)
- 出生数 5,880人(H14)⇒7,433人(H24)  
若年出産(19歳以下) 0.21%  
高齢出産(35歳以上) 37.7%
- 待機児童の多さが有名。
- 在宅子育て世帯の割合 0歳87.7% 1歳75.2% 2歳71.0%  
3歳14.9% 4歳6.9% 5歳6.8%

**■子ども計画の基本的考え方**  
基本方針「子どもの視点」の重視

## 所感と課題

**民間グループが担う役割**

- ・個別対応。
- ・相気強く付き合うこと。
- ・お互いさまという感覚。
- ・存在を認め合う。
- ・「誰の目も「なんの」大文字なんだけ」を共有する。
- ・経験の共有。
- ・仕組みが循環し、息づく。

**この社会のなかで子どもを生み、育てていくこと。**

- ・私たちは詳細にさらされ、考えすぎている。
- ・各セクターがいっぱいいっぱい。
- ・子育てに対する経験値が低い。かつ感受性を磨き上げて生活してきている大人が多い。
- ・何とかやっつけていけるか=解決。
- ・「助けて」という力。

**市民が育てていくこと**

- ・産前産後だから伝わること。
- ・母親が地域との窓口になる。
- ・川の流れると、窓の窓になる。
- ・小学校で開会する。
- ・子どもたちが市民になる。
- ・働き方や働く場の提言。

**心身と暮らしを整える支援**

- ・「サマアの危機」を教える。
- ・大人も子どももポテンシャルを高める。
- ・「トリバコ」つ山の「たぬきさん」を体験できること。それを受け止める器。

**評価の目に耐えられる体力**

グループディスカッション

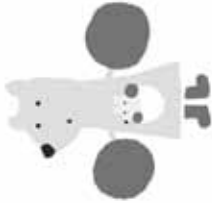
わがまちに求められる  
産前産後ケアとは

コメンテーターの福島富士子さんから、産前産後ケアアプローチに向けてのキーワードをいくつか挙げていただきます。  
事例報告を聞いた感想や、自身が活動する地域の産前産後ケアの現状や課題をシェアしながら、キーワードを手がかりに、妊娠期からの切れ目のない支援のスタート部分を考えてみましょう。

- あなたのお住まいの自治体の人口規模と年間出生数
- あなたのお住まいの自治体の出産事情



ご清聴ありがとうございました。



## 第2部

# 子育て家庭を支える 重層的ネットワークの構築

---

平成27年4月1日から本格実施となる子ども・子育て支援新制度では、子ども・子育て支援事業の実施主体を市区町村と定め、地域の実情に沿った事業計画の策定と推進が義務づけられています。計画策定には当事者にも協働に参画してもらい、当事者のニーズ調査から、5年後の「わがまち」の実情を予測、当事者の目標に立った支援メニューの量と質の拡充を目指します。それと並行に備えた財源に留まらせない役割を担うのが、新たに事業として加えられた「利用者支援事業」です。

ガイドライン案によれば、「利用者支援事業」は、これまでの窓口での相談に留まらず、当事者の課題を評価・分析しながら地域の支援メニューとマッチング、個々の実情に合わせたサポート体制の実現を、地域資源を巻き込んだ形で展開することを目指しています。

利用者支援で求められるのは、当事者のニーズを細かく読み取りながら、本人の持てる力を引き出し、子育ての第一義的責任を全うできることと併せて、当事者を支援される人に留めたい支援のあり方と、個別ニーズに沿った支援体制を作り上げるための施策にも重なるネットワークのあり方。その具体的な実施例を、2つの団体の事例を通して学び、わがまちの支援とネットワークのあり方について、考えてみましょう。

## プロフィール

**事例発表者**

- 栗田典子（もりた けいこ）NPO 法人わら子育てネットワーク代表理事  
NPO 法人ホームスタート・ジャパン/理事 NPO 法人さいたま NPO センター理事  
和歌山県教育委員会  
埼玉県教育委員会  
栗と二人の息子の4人家族  
子育て当事者同士の活動からピアの立場からの子ども子育て支援の地域活動を続けてきています。  
好きな言葉はエンパワメント。信職、あたたかい地域のつながりを大事にしたかと思っています。
- 原 真紀（はら まみき）NPO 法人びーのびーの副理事長  
東京都北区で子育て支援施設を立ち上げ施設長  
神奈川県横浜市長

**ファシリテーター**

- 柳瀬真智子（まことずか さとこ）NPO 法人水戸こどもの館理事長  
茨城県生まれ。
- 松田妙子（まつだ たえこ）NPO 法人せいたがゆ子育てネットワーク代表理事  
3ページ参照。



19

40



## 東京の近郊都市 埼玉県和光市の場合

子育て家庭を支える重層的ネットワークの構築

NPO法人わこう子育てネットワーク  
代表理事 森田圭子  
にっぽん子育て応援団 子育て支援者研究セミナー  
子育て現場のケアコミュニケーションを考える 第2部 2014/10/24

NPO法人わこう子育てネットワーク 1

## 地域和光市の場所・人口



交通の便良い・東京都隣接  
人口8万人  
平均年齢39歳・核家族  
面積11km<sup>2</sup>  
転出、転入が毎年1割  
出生数850～900人  
待機児童数のべ368人

NPO法人わこう子育てネットワーク 2

## わこう子育てネットワークの 設立(2000年)を支えた力

子育て中の当事者の思い、状況  
仲間がない、行き場がない、情報が無い、  
これでいいのかわからない、行き詰まり感  
社会からの取り残され感 → 孤立

自信の喪失～これではいけない焦り  
当事者の課題意識～強いモチベーション、共感性

NPO法人わこう子育てネットワーク 3

## ミッションは 当事者視点から市民視点へ

ひとりの子育てから  
みんなの子育てへ(H12)

社会的な意識へ  
大人も子どもも心豊かに暮らす  
子育てしやすいコミュニティ作り(H16)

NPO法人わこう子育てネットワーク 4

## 家族(子育て)支援の方針

家族が孤立しないまちに

～顔の見える(固有名詞の)つながりを  
乳幼児期から家族が地域とつながる

⇒ 将来まで活かされるつながり


- ・子育て中の親子のこころの居場所を作る。
- ・家庭訪問型子育て支援～アウトリーチ
- ・多様な切り口で～運ぶのは家族自身

子どもの育ちを支えるまちに

## 子育て支援拠点の運営


自主事業子育てサロン(2000年)から  
和光市委託事業「おやこ広場もくれんハウス」(2006年)

否定されたり、指導されたりしない  
受容される場～私の居場所



親が自分なりの  
子育てを  
見つけようとしてい  
くプロセスを支えて  
エンパワメントする  
ピアサポート  
同じ立場の仲間  
として支える

おやこ広場もくれんハウス  
月～金(土は月一回) 10時から16時  
年間90000人来場



もくれんハウスで子育て仲間づくり

## 拠点の利用は？

どのくらいの方々が利用しているのでしょうか。

利用している 34.3%

利用していない 62.3%

n=1262

(和光市子ども・子育て支援事業計画のためのアンケート調査 H25. 8)

## 拠点を利用しない理由

1. 事業の場所が遠い 7.8%
2. 曜日、時間が合わない 28.2%
3. 友達がいないので入りづらい 7.3%
4. 場所がわからない 1.9%
5. 利用料がかかる・高い 0.5% (和光市は無料のサービス)
6. サービスの質に不安がある 0.6%
7. 自分が事業の対象者にならない 0.6%
8. 事業の利用方法がわからない 2.3%
9. 特に利用する必要がない 36.5%
10. その他 14.1%

24

## 和光市の訪問型育児支援

こんにちはは赤ちゃん訪問

ファミリー・サポート事業

養育支援訪問事業

ホームスタート

11

## 気になる子育て家庭～Yes or No？

### 行政施策(こども福祉、母子保健)のすきま(Niche)

- 地域子育て支援拠点事業に  
出てこない親・来れない親??がいろいろあるよね……!
- 乳児家庭全戸訪問事業で発見された  
気になる家庭を発見しても継続したケアができない!!!
- 養育支援訪問事業で対応できない  
育児困難家庭とされない少し気になる家庭には支援できない!!!
- ファミサポ(子育て援助活動支援事業)でケアできない  
親の気持ちを十分に聞けない! お金を払えない家庭はどうする?

12

25

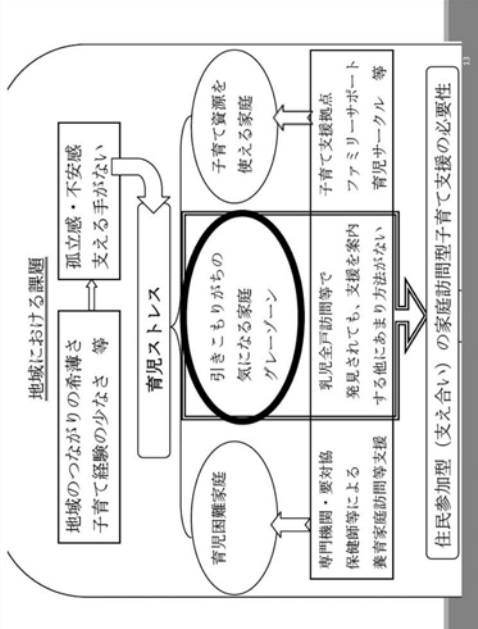
### 家族が孤立しない 多様な受け皿作り～選ぶのは家族自身

- 子育てサロン・おやこ広場もくれんハウス
- わこわこネット子育て電話相談
- 情報発信(紙媒体・ウェブサイト・メルマガ・SNS)
- 多文化子育て支援
- 子育て講座・子育て支援の講座
- ハハ組(父親育児参加ネットワーク)
- 冒険遊び場事業
- 他団体との各種テーマの協働事業(イベント、実行委員など)
- 特性を持つ子どもの親の自助グループ設立支援
- ホームスタート(家庭訪問型子育て支援)
- 学童期思春期親育ちサロン



質の担保を支える  
仕組みを持つ  
アウトリーチ  
訪問型子育て支援との  
出会い

つどいの広場「もくれんハウス」を運営しながら「もっと早くにきたらよかった」という声」来なくなつた親子「地域の中で出会った悲しい事故」虐待のグレーゾーンへの支援は、それまでは保健師の訪問活動が中心だった。でも保健師さんたちは忙しい。



## 当事者の立場から考える視点

行政の縦割りでなく、きめ細かいニーズに、一人一人を大事に、  
多様な入口・テーマ・方法

## 訪問型子育て支援 ホームスタートとは

- 研修を受けた子育て経験者が
- サポートを受けながら定期的に乳幼児家庭を訪問し
- 良き友人として傾聴と協働をするボランティア活動を

を安心して安全に行うための  
地域住民主体のささえあいの仕組み

### 誰でも使っている訪問型支援



**ホームスタートホームビジター養成講座**



**家庭訪問型子育て支援ホームスタート  
先輩ママの訪問支援で孤立防止**

## 6 ホームスタートの「強み」と「弱み」

「強み」

- # ネグレクトを助長せず改善につながる
- # 子育てのスキル・意欲獲得につながる
- # 孤立化防止になる
- # 情緒の安定が得られる

「弱み」

- # 重篤な問題に単独で対応できない
- # 家事の肩代わりはできない

## 協働の必要性

## 政策提言 自主事業から制度化へ

平成21年度 オーガナイザー、ビクター養成 埼玉県助成金  
 平成22年度 訪問支援開始 12家庭  
 厚生労働省外郭団体 福祉医療機構(WAM)助成金  
 平成23年度 23家庭 内閣府  
 平成24年度 15家庭 「新しい公共支援事業」補助金  
 埼玉ホームスタート推進協議会の立ち上げ  
 メンバー：県内のHIS取組団体、取り組み地域の自治体、  
 埼玉県、大学、生活協同組合、関連NPO

マルチステークホルダー・プロセス  
 多様な担い手が協働して地域の諸課題の解決に当たる  
 仕組み構築を目指す。

23

NPO法人こころ育てネットワーク

## 政策提言 自主事業から制度化へ

平成25年度 和光市協働提案事業採択  
 和光市提案事業「子育て家庭孤立化防止事業」  
 公募にホームスタートで応募し採択 利用家庭 24家庭  
 平成26年度 和光市ホームスタート事業開始 現在 21家庭  
 和光市子ども子育て支援事業計画(2014策定完成予定)  
 子育てを支える和光市独自の取り組み に位置づけ  
 (地域子ども・子育て支援事業)

24

NPO法人こころ育てネットワーク

31

## 地域行政との連携

- \*保健師からの紹介が全ケースの約3割  
 (こんには赤ちゃん訪問でのチラシ配布)
- \*養育家庭訪問との連携
- \*ホームスタートから要保護児童対策へ  
 対象家庭の例  
 多胎育児家庭、高齢の母親、転居、初めての子育て、産後うつ、  
 病気の親、障がいのあることを持つ家庭、シングル、  
 頼る人がない、経済的な課題のある家庭、ほか

21

NPO法人こころ育てネットワーク

## 傾聴と協働で 寄り添う支援 ～ 最初の一步

話せてうれしかった。  
 支援センターに行けるようになった。  
 一人だけじゃないと思えた。  
 なんとかかなと思えるようになった。  
 誰かに助けてといえるようになった。  
 いつか私もビクターになりたい。  
 子どもがかわいく思えるようになった。  
 情報がいろいろと分かった。  
 子育てが楽しいと思えるようになった。  
 子育ては大変だけど、こんなもんなんだと思えるようになった。

22

NPO法人こころ育てネットワーク

30

子育て家庭が孤立しにくいコミュニティをつくりたいなら  
自分たちでできることには限界  
自覚しながら地域連携

## 行政やNPO等との連携構築

計画策定への参画、協力型、巻き込み型  
～公募委員、パブリックコメント、  
公聴会、……市民参加の波  
アドボケート

25

NPO法人こども子育てネットワーク

## 市の施策は法律と計画に則り 計画はニーズ調査に基づく

市の県の委員会や計画や条例作りなどにすべて参加  
最上位計画 総合振興計画審議会に参画  
新エンゼルプラン(H12年ごろ)  
市民参加条例 協働指針策定  
次世代育成支援行動計画H17～22  
次世代育成支援後期行動計画H22～26  
地域福祉計画

子ども子育て新制度(H27年から)に向けて  
子ども子育て応援会議 に参画

26

NPO法人こども子育てネットワーク

## 和光市の子ども子育て支援事業計画の目指す形(予定)

### カテゴリ-3資料

妊婦、出産、子育ての切れ目ない関係・連携・連携の連携(シームレスケア) イメージ(案)

子ども・子育て支援

保健・医療連携

学校・教育連携

## 行政施策 平成26年10月から 和光版ネウボラ(産前産後ケア)の導入

母子保健相談事業(新規)(個別マネジメントの充実)  
地域のネウボラ拠点の所に母子保健コーディネーターが配置され、妊産期から就学までの健康や子育ての相談や、母子健康手帳を発行します。  
【実施場所】みなみ子育て支援センター、しらこ子育て支援センター、わこう産前・産後ケアセンター  
産後ケア事業(新規)(安心と安全を担うサービース)  
産後・体調不良のある、育児不安が強い、赤ちゃんの体調が不安定、家族からの支援が受けられない人等に家庭訪問や「母子健康と子育て」にご相談ください。  
【内容】ショートステイ、チャイルドケア、訪問型産後ケア(看護・ヘルパー型)(一部自己負担あり)  
産前産後サポート事業(充実)(地域におけるサービースの充実)  
産前産後教室を地域のネウボラ拠点の所で実施します。  
【実施場所】みなみ子育て支援センター、しらこ子育て支援センター、わこう産前・産後ケアセンター、まぐらひハイツ

ネウボラ ～ フィンランド語でアドバイスの場  
産前から未就学期間の専門家による個別ニーズを揃った支援「かりつけの相談」

28

NPO法人こども子育てネットワーク

## 新制度への位置づけ～ネウボラと連携 (和光市子ども子育て支援事業計画)

子育てを支える和光市独自の取り組み(地域子ども・子育て支援事業)

※下欄は、法で定められた地域子ども・子育て支援事業(13事業)に含まれる事業

### (3) 訪問系事業

- ▶ **乳児保健全戸訪問事業**  
こどもには赤ちゃん訪問事業、生後4か月までの乳児のいるすべての家庭が対象。
- ▶ **養育支援訪問事業**  
和光市育児支援家庭訪問事業、子育てに対して不安や孤立感等を抱える家庭等で、養育支援が必要な家庭が対象。保護者の育児、家事等の能力を向上させるため、相談や育児、家事支援を行う。
- ▶ **その他家事支援事業** (和光市社会福祉協議会の実施するゆめあいサービス等)
- ▶ **ホームスタート事業等**  
育児不安等を抱えた、就学前の乳幼児を養育する家庭が対象。経験や家事の伝承を支援。

28

NPO法人こども未来センター



新制度に乗り切っていない  
地域のニーズ～今後の課題

34

## 子どもの育ちを支える「遊び」 冒険遊び場 プレイパーク

自主事業と実績を重ねて8年、政策提言発信  
次年度からの事業へ

ほかに

### 学童期から思春期以降の子育て

生活者のニーズからの試行と実践

31

NPO法人こども未来センター

ありがとうございました。

32

NPO法人こども未来センター

35





### 事例①：社会のストレスフルから家族を守る支援

1歳半で来館  
・プログラムの紹介  
※「震災その後を考えるサロン」に参加  
・近隣保育所の一時預かりを利用  
→全日型へ移行  
・相談枠に入る。  
夫からの精神的暴力  
・家族それぞれへの支援  
夫へのアプローチ イベントにお誘い  
夫を中心とした家族のコミュニティの構築  
パパの会に案内 仕事以外の居場所の紹介  
妻への自助団体紹介  
子への最善の日中の保育支援  
・継続の相談

常設の場での寄り添い支援 / 支援過程の獲得

家族構成成員それぞれへの支援策  
プログラムの詳しい状況の把握  
保育所との連携  
母のフォロー  
チームでそれぞれに出来ることの構築  
多様な子育てモデル  
ピアカウンセリング  
保育所との連携  
立て直しと確認

### 事例②：Kちゃんの成長と共にある支援

生後間もなく来館  
・ひろばの様子…参道がらよつとゆくりめ  
センター紹介  
親子教室  
親子との関係性の構築  
・障害受容…日々泣いて暮らす母 開始時間30分早く来館。2階和室で母子で過ごす  
スタッフやボランティアと監査を取り、少しずつ回復  
担当保健師訪問 理解者・当事者同士の繋ぎ  
・プログラムへ誘う…※「のびのび月ようび」子ども同様の成長を一緒に喜び分かち合う  
誘うことの了解と見守り  
・保育所入園……保健師との面談 保健師訪問場所の活用 場所のプログラムへの繋ぎ提供  
・保育所の入所……行きたがらないKちゃん 運動会へ応募  
保育所入所手立て  
・働きたい？働きたくない？…就職支援 マザーズハローワーク紹介  
関係機関相談  
関係機関紹介  
・夫のうつが養生…誰も頼れなくなった母 第2子妊娠 親子との関係  
相談枠の紹介 母の医療機関の紹介 医療機関相談  
・預かり手の紹介…人を運ぶ母、体力的な心配、有償無償の調整  
子育てサポートシステムによる保険適用範囲を優先  
・就学支援……近隣立校への入学、学校支援員を誘ってお手伝い  
預かり資源紹介  
地域の担い手探し  
学校連携の支援  
プログラム新出

常設の場での寄り添い支援 / 支援過程の獲得

乳児期～学童期入口まで切れ目ないサポート

### 子育て拠点を支える重層的ネットワークの構築とは！？

- 1) 補完し合う役割 (機能) 「補完の原則」
- 2) 入口 (インターフェース) & 抱え込まないために求められる専門性はある
- 3) 機関でなく「人」で繋いでいくこと
- 4) ネットワーク自体を対処型で構築しないように・・・  
「その人のためのネットワーク」→「次の人のためのものになる」
- 5) インフォーマル支援をたくさん創ること  
→ まちづくり・地域福祉の担い手づくりに繋がる (※1)  
「力」(残存能力)を繋ぐ



どちらか一方の日常の様子→

## グループディスカッション

### わがまちの課題と 重層的な支援のあり方

ファシリテーターの横須賀聡子さん作成の、グループディスカッションのためのワークシートをお配りします。ご自身が活動する地域の現状や課題をシェアしながら、事例報告を聞いた感想や、支援のあり方や、さまざまな既存のコミュニティなどワークシートを手がかりに、支援のあり方や、さまざまな既存のコミュニティなどの地域資源、それらをもとに当事者の事情に沿った支援ネットワークの組み立て方などについて考えてみましょう。

子育て支援者向け研修事業<大規模研修会>

子育て支援者研究セミナー報告書

平成 26 年 11 月 1 日発行

発行所：にっぽん子育て応援団

郵便番号 162-0853

東京都新宿区北山伏町 2-17 ゆったり～の共同事務所内

電話 & FAX 03-3269-3314

Mail : info@nippon-kosodate.jp

URL : <http://nippon-kosodate.jp>

この報告書は、一般財団法人こども未来財団子育て支援者向け研修事業<大規模研修会>の一環として作成致しました。

(C) Nippon Kosodate Ouendan 2014, Printed Japan

この報告書の無断転載・複製は、著作権法上の例外を除き禁じられています。